令和６年度

年度

月

QR コード

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。

テキスト

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。

事業運営 公益社団法人 青少年健康センター【茗荷谷クラブ】

目 次

Ⅰ．はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅱ．事業概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

１．メルクマールせたがやの理念・体制

２．活動内容

３．世田谷区の若者支援ネットワーク

Ⅲ．活動実績 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

１．実績数値

２．利用状況

３．相談登録ケースに関する分析

４．ティーンズサポート事業

Ⅳ．支援効果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

１．方法

２．結果と考察

Ⅴ．世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

１．概要

２．「リンク」における活動実績

３．メルクマールせたがやから「リンク」登録となったケースの特徴

Ⅵ．事例報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

１．過去の人間関係に傷ついていた本人が居場所利用につながった事例

２．家族面接から本人への訪問相談を導入した事例

３．長期にひきこもっていた本人が居場所利用を通して変化のあった事例

４．家族面接を通して、家族と本人の変化がみられた事例

５．困窮した高齢の親から「リンク」相談につながり、本人の自立を促した事例

Ⅶ．メルクマールせたがや利用者の声 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

 １．アンケート結果

 ２．本人の声

 ３．家族・その他の声

Ⅷ．広報・啓発活動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

 １．広報・啓発活動

 ２．視察・見学対応

Ⅸ．支援方針に基づく取組みの進行状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

１．令和6年度の取組み状況

２．今後の課題と展望

Ⅰ

 はじめに

Ⅰ．はじめに

メルクマールせたがやは、平成26年9月の開所から10年が経ちました。開所当初から、せたが

や若者サポートステーションと共に若者総合支援センターの1機関として、若者一人ひとりが望む

自分らしい社会参加に向けた準備支援に取り組んできました。また、令和4年4月からは、生活困

窮者自立相談支援センターであるぷらっとホーム世田谷と共同で、区内に新たに設置された世田谷

ひきこもり相談窓口「リンク」（以下、「リンク」と記す）を運営することとなりました。「リンク」

の開設に伴い、太子堂にあるSTKハイツに前述の3機関で入所し、複合施設となって若者支援・

ひきこもり支援を複数機関で支援できる体制が整備されました。

しかしながら、昨今の若者の現状は、文部科学省の調査によると令和5年度の全国の不登校児童

生徒数が約34万6千人と過去最多を更新し続けています。また、厚生労働省から発表された令和

6年の自殺の状況では、小中高生の自殺者数は529人と過去最多を更新したと報告されています。

いずれも子どもの人口数は減少しているにもかかわらず不登校者数や自殺者数は過去最多を更新

しているという由々しき事態です。現代の子ども・若者にとって、今の社会は大変生きづらい社会、

明るい希望や展望が描けない社会になっているのではないかと考えます。

令和6年度のメルクマールせたがやの活動実績は、延べ相談対応件数は6,300件を超え、前年度

より約500件増となりました。過去最多の相談対応件数を更新し続けており、継続的な支援が展開

できていると言えます。一方、新規相談登録件数は減少したため、新規登録に向けたつなぎの支援

が課題でしょう。加えて、子ども・若者支援協議会における個別ケース検討会の開催数が年間で4

件と少なかったことも、今後の課題ととらええています。今後は、他機関と一堂に会して情報交換

や支援方針を検討できる個別ケース検討会議の活用について、所管課をはじめ区内の関係機関から

意見を伺いながらより良い会議体のあり方を検討してまいります。

令和6年度の世田谷区の動向をみると、多機関協働事業者に5地域の保健福祉センターが加わ

り、重層的支援体制整備事業が区内全域で展開されました。ぷらっとホーム世田谷が主催する支援

会議だけでなく地域で開催される会議に参加させていただく機会も増えました。多くの機関と関わ

る中で、改めてメルクマールせたがやにおける活動内容や利用対象者について考えさせられる機会

が増えています。心理や福祉の専門資格を有する職員構成であることから、従来の支援や制度の狭

間の部分に専門職への期待が寄せられているものと理解していますが、ひきこもり相談窓口「リン

ク」における支援も含めて活動内容の整理が必要だと感じております。縦割りだった制度に横串を

通す取組みは容易ではありません。あらゆる機関、支援者が同じ目的を共有して、多角的な視点で

世帯を理解すること、必要な支援や関われるタイミングを図りながら各機関の強みを持ち寄ること

で、多機関協働が実践できると考えます。また、キーパーソンとなる支援者を支える仕組みも整え

ることによって、継続可能な見通しの持てる支援が実施できると感じています。多機関協働事業が

動き始めたことによって、見えてきた課題もあることと思います。成果と課題を持ち寄りながら、

引き続き世田谷区の重層的支援体制整備事業に寄与できるよう尽力いたします。

令和7年度は、STKハイツから世田谷区役所三軒茶屋分庁舎5階に移転しました。ぷらっとホ

ーム世田谷、せたがや若者サポートステーションとともに3機関が同じフロアに横並びになり、こ

れまで以上に連携が取りやすい環境になりました。生きづらさを抱えた方が自分らしく人や社会と

つながれるよう活動してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

 令和7年5月 メルクマールせたがや施設長 廣岡武明

Ⅱ

 事業概要

 １．メルクマールせたがやの理念・体制

２．活動内容

３．世田谷区の若者支援ネットワーク

Ⅱ．事業概要

１．メルクマールせたがやの理念・体制

メルクマールせたがやは、一人ひとりの相談者を大切にするその理念として、3つのCHAを

掲げ、ひきこもりなどの様々な理由から社会との接点が持てず、生きづらさを抱えた方及びその

家族に対して、多様な自立や相談者の望む生き方をサポートすることを目的に、相談支援(来所・

訪問)、居場所支援、家族支援(家族会・出張セミナー)、他機関連携を実施している。

3つのCHA －メルクマールせたがやの理念－

CHANCE －きっかけ作り－

不登校やひきこもりなどで生きづらさを抱えた方やその家族を対象に、変化に向けた一歩を踏み

出す・動き出すきっかけを作るための支援をします。

CHALLENGE －挑戦・動き出し－

 活動やプログラムを通じて、新たなものに挑戦していくことをサポートします。

また、利用を重ねることで、自信をもって自立に向かえるよう支援します。

CHANNEL －つながり－

 他の支援機関とつながり、連携をします。人とのつながり、関係性が生まれることにより、メル

クマールせたがやを利用された方が再び社会とつながることができるよう支援します。

【対象】

区内在住の中高生世代以上の方とその家族。

なお令和3年度まで、本人(p.76用語解説参照)が39歳までの方とその家族を継続的な支援の

対象としていたが、令和4年度からは、①メルクマールせたがや利用者で40歳を迎えた方、

②「リンク」を経てメルクマールが継続的な相談を行う方、について年齢上限を撤廃し相談支

援を行っている。相談者が18歳未満の場合、利用登録には保護者の了承を必要とする。協定

大学に在籍する学生は、住所地に関わらず利用できる(p.9 )。

【開室日・時間】

月曜日～土曜日(祝日、年末年始は除く) 10:00～18:00

【料金】

無料。ただし、本人に精神疾患、発達障害などの診断があり、医療機関を利用している場合は、

居場所利用にあたって主治医の意見書が必要であり、その費用は自己負担となる。また、居場

所のプログラムにおいて、材料費の実費負担として参加費を徴収するものもある。

【職員】

公認心理師・臨床心理士・精神保健福祉士、社会福祉士等の有資格者もしくは若者・ひきこも

り支援の専門性を有する者で構成される。令和6年度は職員28名(常勤8名、非常勤20名)、

開室日平均12～13名の人員体制であった。

２．活動内容

１)相談支援

相談支援は、来所相談、訪問相談、出張相談を展開している。インテーク(初回面接)にて相談

者の話を丁寧に聴き、本人及び家族の悩みや心配事、要望などの相談内容を把握する。相談を継

続する中で問題・課題の解消に向けた適切な支援を行っている。来所による個別相談は担当制で

実施しており、家族からのみの相談も行う。

寝室の一角にあるソファー

中程度の精度で自動的に生成された説明

カウンターに置かれている部屋

低い精度で自動的に生成された説明

訪問相談は、原則本人・同居家族の了解を前提とし、家族から本人の状態、家庭での生活状況

などの情報収集を行い、本人とつながることを目的として実施している。必要に応じて、他機関

と連携して訪問を検討し、実施する。

出張相談は、メルクマールせたがやの相談員が区内関係機関・公共施設に出張し、区内遠方

地域での相談支援、他機関とのより円滑な連携を目的に行っている。令和2年6月より区内5

つの総合支所の区民相談室を利用した出張相談会を開始したが、三軒茶屋駅近隣に移転して交

通の利便性が高まったことから、令和6年度からは世田谷地域を除く4地域(北沢・玉川・砧・

烏山)で実施している。また希望丘青少年交流センター「アップス」における出張相談は、平成

31年2月より開始し、毎月第2木曜日に実施している。いずれの出張相談も1回30分程度の

相談を受けている。ひきこもりなど生きづらさを抱え遠方からの利用を負担に感じる方にとっ

て、身近な場所で相談できる機会となっている。

テキスト

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。 (正方形/長方形)

(アップス出張相談会)

(総合支所出張相談会)

２)居場所支援

部屋に備えている様々な家具

中程度の精度で自動的に生成された説明

居場所は社会参加のきっかけづくりのために通うことのでき

る交流の場である。居場所への参加は、グループ登録制として

いる。登録制の居場所にすることで、ひきこもりなどの生きづ

らさを抱えた若者が安心・安全感を持ちながら他者との交流体

験を積み重ねていく場となっている。

【対象】

 メルクマールせたがや利用者で、居場所登録をした39歳までの若者

 ※居場所登録をせずに参加できるオープンプログラムも月8回程度開催(メルサポ2回含む)

【開室日・時間】

月曜日～土曜日(祝日、年末年始は除く)

午前の回 10:30～12:30

午後の回 14:00～16:00 ※イベントの際はこの限りではない

【活動グループ】

グループ名

活動日

説明

Morningグループ

火AM 金PM

人数制限のないグループ。活動日は週1～2回。

Dayグループ

金AM 火PM

人数制限のないグループ。活動日は週1～2回。

First Stepグループ①

水PM(隔週)

定員5名程度の少人数グループ。活動日は隔週1回。

First Stepグループ②

月PM(隔週)

定員5名程度の少人数グループ。活動日は隔週1回

令和6年度は4つのグループで活動した。利用者は登録の際にいずれかのグループに所属す

る。メンバーが固定されている活動グループの他に、グループ制限のないフリータイム、イベン

トや居場所登録者以外でも参加可能なオープンプログラムを実施している。

【オープンプログラム】

 グループ登録前に参加可能なプログラム。居場所登録を検討しているが参加している利用者の

様子や居場所の雰囲気がわからなかったり、どのように過ごしたらいいか不安を抱えていたり

する方向けに、簡単な運動、座学形式の講座、クラフトや近所の散策など、興味・関心のある

ものから参加しやすいようプログラム内容を工夫し実施している。

 【メルサポ】

 若者の中には、「支援」「相談」に対して構えのある方がいる。そこで、相談を経ずに予約もな

しで「気軽にふらっと立ち寄れる居場所」として、平成30年度より世田谷若者総合支援セン

ターをともに担う就労支援機関のせたがや若者サポートステーションと共同で実施している。

毎月祝日を除いた第1、4土曜日に実施した。主に2機関の利用者が集う場所となり、様々な

段階にいる参加者同士の交流が図られている。なお、令和7年度からは第2、4土曜日に実施

日を調整している。

テキスト

中程度の精度で自動的に生成された説明 (正方形/長方形)

テキスト が含まれている画像

自動的に生成された説明 (正方形/長方形)

(メルサポチラシ表) (メルサポチラシ裏)

【居場所スケジュール】

 イベントやプログラム名を記載した居場所スケジュールは、毎月作成して利用者に配布・周知

している。

カレンダー

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。

(令和6年11月号)

 ３)家族支援(家族会)

家族会には、講演会による「学び」、家族同士の「交流」の 2つの要素がある。特に、家族同士の交流は家族会

特有の機能であり、家族のピアサポート(p.76用語解説参照)の場となっている。基本的に家族会の前

半が本人理解や接し方などの心理面をはじめとした家族セミナー、後半が同じ悩みを抱える家族同士

の交流会で構成される。令和3年度より休止していた交流会は、令和5年5月に新型コロナウィルス

感染症が第5類に移行したことを受け、再開した。他支援機関とつながりがなく、悩みながらも個別

相談へのハードルが高いと感じて孤立しがちなご家族に向けて、聴講で参加できる家族会は支援機関

へとつながる入口機能となり、孤立防止と早期介入を目的に行っている。

【対象】

区内在住のひきこもりなど生きづらさを抱えた方の家族(年齢は問わない)

【開催日・時間】

毎月第3土曜日 10:30～12:30 (※8月を除く)

【令和6年度家族支援実施内容】

４)出張セミナー

出張セミナーは、メルクマールせたがやがある世田谷地域以外の4地域(北沢・玉川・砧・烏山)で

の利用者の掘り起こし、若者支援・ひきこもり支援の普及啓発・広報活動を目的としている。平成

28 年度より、世田谷若者総合支援センターとしてせたがや若者サポートステーションと共同で開催

しており、これまで精神科医やファイナンシャルプランナーなどによる講演を行うことにより、地域の

方々に事業を理解してもらうきっかけにもなっている。

【対象】

対象要件なし。ただし、定員に達した場合は区民優先とする。

【開催日・時間】

年4回 13:30～16:00

【令和6年度出張セミナー実施内容】

第1回 令和6年6月29日 烏山区民会館

「子どもの心の理解と対応」

講師：栗田明子氏(医学博士・公認心理師)

第2回 令和6年9月14日 砧総合支所区民集会所

「子どものサポート～親だからできること、親だからしにくいこと～」

講師：柴田泰臣氏(就労移行支援事業所ビルド神保町施設長)

第3回 令和6年11月30日 梅丘パークホール(北沢区民会館別館)

「ひきこもりのサバイバルプラン～親なき後のための生活設計～」

講師：村井英一氏(ファイナンシャルプランナー)

第4回 令和7年3月15日 玉川区民会館

「不登校・ひきこもりの対話的支援」

講師：斎藤環氏(筑波大学名誉教授)

５)他機関連携

他機関連携は、「つながる・つなげる支援」として社会への自立の一歩、暮らしやすさを支援す

る上で必須である。子ども・若者支援協議会(次項参照)のもとに「不登校・ひきこもり支援部会」

「思春期青年期精神保健部会」、重層的支援協議会のもとに「ひきこもり・就労支援部会」(p.47)、

「8050支援部会」が位置付けられている。区内には就労、障害、生活などの支援機関が多く存在

し、各協議会のネットワークおいて、本人のニーズにあった適切な機関と顔の見える連携を目指

してきた。

また、世田谷区と区内大学とで若者支援に関する協定が結ばれ、平成27年度よりひきこもり

などの学生支援、若者の身近な居場所づくりを進めている。令和5年度現在、昭和女子大学、日

本大学文理学部の2校との連携を実施している。

タイムライン

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。 (正方形/長方形)

①個別ケース検討会議

複合的問題を抱える利用者の支援には、多機関・多職種が互いの専門性を活かし合うことが

大切となる。機関同士の情報交換や支援状況の共有、支援方針の決定、役割分担などを目的に

開催する。

子ども・若者支援協議会と重層的支援協議会のもとに位置づけられた担当者レベルでの会議

のため、出席者は各機関における実務担当者を中心に構成される。会議の内容や知り得た情報

には守秘義務が課せられる。メルクマールせたがやは、世田谷区の子ども・若者指定支援機関

として、子ども・若者育成支援推進法に基づく個別ケース検討会議を開催することができる。

 ②せたがや若者サポートステーションとの連携

 せたがや若者サポートステーションとは、世田谷若者総合支援センターを担う機関として、

密に連携して若者支援に取り組んでいる。同じ建物という立地条件を活かし、文字通り担当者

同士の「顔の見える連携」ができることで迅速な対応につながっている。

 また、世田谷若者総合支援センターとして、合同での出張セミナー(p.8)、「メルサポ」(p.6)

や心理教育的なワークショップを中心とした「ここらぼ(旧メルク・サポステ合同プログラム)」

などの居場所プログラムを開催している。

３．世田谷区の若者支援ネットワーク

 世田谷区は、平成27年2月に子ども・若者育成支援推進法第19条に基づき、主に区内の子ど

も・若者支援に関する機関の連携を円滑に進めることを目的とした「世田谷区子ども・若者支援

協議会」を設置した。会議体は代表者会議、実務者会議、個別ケース検討会議に区分される。機

関同士の情報共有、支援内容の協議など関係機関連携を強化することにより、ひとつの機関で区

内の若者を支援するのではなく、区全体で総合的かつ継続的な支援を実施するためのネットワー

クが構築されている。

 以下の表は、子ども・若者支援協議会の開催状況である。メルクマールせたがやは、子ども・

若者育成支援推進法による子ども・若者指定支援機関として、実務者会議となる「不登校・ひき

こもり支援部会」の事務局を務めている。

協議会名年間開催数

世田谷区子ども・若者支援協議会2回

不登校・ひきこもり支援部会3回

思春期青年期精神保健部会2回

協

議

会

関

係

１)不登校・ひきこもり支援部会の主な取組み

不登校・ひきこもり支援部会は主に10代の若者に係る支援機関や教育機関で構成される。令

和6年度に開催された全3回の内容は表の通りである。不登校・ひきこもり支援部会では、不登

校・ひきこもりや若者支援に係る話題提供を行い、参加している委員が積極的に意見・発言を交

わす区内外の支援情報の共有の場となっている。各機関の顔つなぎの場として機能し、構成機関

同士の連携が強化されている。

また、毎年度各構成機関の支援活動の理解を目的として、構成機関別事業一覧を作成している。

第 1 回 7月 4日(木)

第 2 回 10月 3日(木)

第 3 回 2月 6日(木)

【内容】

・部会説明

・各機関の紹介

・話題提供 メルクマールせたが

やより 教育と福祉の協働につ

いて

【内容】

・話題提供① 教育相談課より

「不登校支援の取組みについて」

・話題提供② メルクマールせた

がやより 事例を通しての各機関

における対応について

【内容】

・ワークショップ メルクマール

せたがやより 連携と協働につ

いて考える

・今後の部会について

【不登校・ひきこもり支援部会構成機関】

保健福祉センター健康づくり課世田谷区児童相談所NPO法人東京都自閉症協会　みつけばハウス

保健福祉センター子ども家庭支援課都立世田谷泉高等学校野毛青少年交流センター

保健福祉センター保健福祉課都立中部総合精神保健福祉センター希望丘青少年交流センター「アップス」

障害保健福祉課都立松沢病院池之上青少年交流センター

生活福祉課世田谷区発達障害相談・療育センター「げんき」（事務局）メルクマールせたがや

児童課NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会（事務局）子ども・若者支援課

教育総合センター教育相談課特定非営利活動法人　まひろ（エリア・ワン）（オブザーバー）世田谷保健所健康推進課

【世田谷区子ども・若者支援協議会説明図】

ダイアグラム

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。

Ⅲ

 活動実績

 １．実績数値

 ２．利用状況

３．相談登録ケースに関する分析

４．ティーンズサポート事業

Ⅲ．活動実績

１．実績数値

 平成26年度から令和6年度までのメルクマールせたがやの実績数値は表の通りである。

メルクマールせたがや【令和6年度利用実績】

H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

ケース登録あり2118241404668386359378402413389458407451422416498497934969

リンク対応件数※150710211031089511688921089496110938111842712

ケース登録なし6072031877151619815191625916617111682178948505876496482489537509496585517572541525585633438849H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

4734704564534594594594564604604614627341221166581451169656485105741630539191185119564510102601470456453459459459456460460461462456H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

11504166913069472969710698111113989312098119615675H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

16115110300010000004191738848851066785888371726527124272529172314192218232026178465315433254536748409140000011000002H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月\*７月８月９月\*１０月１１月\*１２月１月２月３月\*合計累計

1303273245883218351645181512792862107\*：出張セミナー実施月

H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

102737175767578808488899019250462262242452223532314926373142131001112472597371757675788084888990902721648807474155575557625472626470696487262795548444434345350246278372786251495961596165587566697374651181252771611535898751414801425H26~R3年度合

計

R4年度合計R5年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

772426212232221132231506822172261781912261518148724151831308H26~R元年度

合計

R2年度

合計

R4年度合計４月５月６月７月８月９月１０月１１月１２月１月２月３月合計累計

101111111111111211274443434444444642

実施回数

延べ参加者数（再掲）

延べ居場所利用者数

メルサポ

実施回数

延べ参加者数

メルぷら（むすびば）

累計件数（来所・訪問・出張相談）

家族会の参加人数

延べ参加者数

ティーンズサポート事業 ※平成28年度より開始

先月末日の累計登録ケース数

当月中の新規登録ケース数

当月中に終結したケース数

（20代に達したケースを含む）

当月末日の登録ケース数

延べ相談件数(来所)

R2年度までは訪問・出張相談含む

延べ相談件数(訪問/出張相談)

個別ケース検討会議の開催数

他機関主催の個別ケース検討会議の出席数

　　※2：平成26年度～令和元年度の訪問実施件数は、希望丘青少年交流センターの出張相談を除く件数　　※3：令和2年度～令和5年度までは５支所

2048

訪問相談実施件数(延べ人数)※2

出張相談(４支所)※3　実施件数(延べ人数)

出張相談（希望丘青少年交流センター

アップス）実施件数(延べ人数)

活動ルーム（居場所機能）の延べ利用人数

延べ利用者数（延べ人数）

アウトリーチ関連数値

当月末日の登録ケース数

延べ相談対応件数(単位：人)

延べ相談対応件数

合計

※1：リンク対応件数：「リンク」の相談にメルクマールせたがやの職員が対応した相談件数

登録ケース数の増減について（実ケース数）

先月末日の累計登録ケース数

当月中の新規登録ケース数

当月中に終結したケース数

１)相談支援

①新規相談登録件数

N=85

N=116

新規相談登録とは、インテーク(初回面接)を行った後に受理会議を実施し、メルクマールせ

たがやで受理したケースのことを指す。令和6年度新規相談登録件数は85件であり、月平均

では7.1件であった。件数が近年減少傾向にある理由としては、令和4年度の「リンク」開設

に伴い、これまでメルクマールせたがやの新規相談で受けていたであろう一定数の層が、「リ

ンク」の新規相談に流れている可能性が考えられるが、引き続きの検証が望まれる。

また令和6年度は新規相談登録件数85件の内、20代が45%(38件)と最も多く、次に高校生

世代以上10代が38%(32件)と高値を示していた。中学生世代は4%(3件)、30代は13%(11

件)、40代以上は1%(1件)だった。また、「高校生世代以上10代」の割合が増えている点に着

目したい。義務教育が終了する中学卒業年齢以降、そして、子どもの支援から大人の支援への

適切なつなぎがなければ、必要な支援からこぼれ落ちやすい「18歳の壁」とも言われる18歳

以降の年代を新規相談で受ける意義は大きい。新規相談登録件数の総数は、令和5年度の116

件と比べて31件減少しているが、年齢層の割合は令和5年度と同様の傾向であったことから、

全体的に新規登録件数が少なかったと考えられる。

平成26年開所から令和6年度まで、新規相談登録ケースの年齢分布の推移について上図に

示す。20代は年度毎にばらつきが見られるが、30代は令和4年度から約1割となり開所当初

と比べて減少傾向にあり、令和4年度に「リンク」が開設したことによる影響が考えられる。

一方10代の割合は令和元年度に一度減少しているが、再び増加している。新規相談に関して

は、若年齢化が進んでいるといえる。

②ひきこもり者数割合

N=85

N=116

次に、ひきこもり者数割合について上図に示す。メルクマールせたがやでは、将来ひきこも

りに移行する可能性のある6ヵ月未満の準ひきこもりを含めてひきこもりとして定義してい

る。令和6年度新規相談登録件数の内、ひきこもり状態は38%(32件)だった。平成26年の開

所から令和2年まで新規相談登録件数のうち、ひきこもり状態にある利用者の割合は約6割を

維持していた。令和3年度以降は、ひきこもり状態ではない「それ以外」の割合が上回ること

もあり、傾向が変化しつつある。これは、新規相談登録が若年層の割合が高くなり、所属があ

る段階などひきこもり状態になる前に早期に相談登録利用につながることで、ひきこもり状態

の割合が低くなったと考えられる。

\*ひきこもりの定義(厚生労働省「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」より)

様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学，非常勤職を含む就労，家庭外での

交遊など)を回避し，原則的には６ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他

者と交わらない形での外出をしていてもよい)を指す現象概念。

\*準ひきこもりの定義

ひきこもりの定義のうち、６ヵ月という期間にこだわらず、将来的にひきこもりに移行する可能

性が高い状態

※ひきこもりの定義にある原則6ヵ月以上という期間は、2025年1月に厚生労働省より発行

された「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～」にて見直しが図られて

ひきこもり支援の対象者は期間を問わないとされている。

③終結件数

 終結とは、就労や就学、他機関の利用など様々な理由でメルクマールせたがやの利用を終了

したケースを指す。令和6年度の全終結件数は102件と開設以来最も多い件数であった。月別

に見ると5月が19件と最も多く、新年度を迎えて安定的な社会参加の見通しが立ったころに

終結の申し出る場合が多かったと考えられる。

終結理由などに関する詳細は、終結理由内訳(p.29)にて述べる。

④延べ相談件数

延べ相談件数は、来所相談、訪問相談、電話・文書対応などあらゆる方法での相談件数を合計

した数値である。令和6年度は、月平均約520件の相談対応を行った。

平成26年度開所から令和6年度までの延べ相談件数を上図に示す。平成29年度以降、延

べ相談件数は年間3,000件を超える数値で安定している。一方、令和3年度以降は相談件数が

増加傾向にある。新規相談登録件数が令和5年度より減少、かつ終結相談件数が100件を超え

る状況においても延べ相談対応件数が増加した背景には、①モニタリングで経過観察の状況に

あったケースに連絡を取った際に、安定しているケースは利用者の意向を確認して一旦終了と

する等登録ケースの整理を行ったこと、②非稼働ケースを整理したことによる事務負担の軽減

により、継続相談の対応を充実させることができたことが影響していると考えられる。

⑤延べ訪問相談・出張相談件数

訪問相談件数とは、利用者の自宅への訪問相談と、こころスペースや関係機関に出向いての

出張相談、関係機関への同行など、メルクマールせたがや以外の場で相談を実施した延べ件数

である。メルクマールせたがやのスタッフが、「リンク」として対応した訪問や出張相談、関係

機関への同行などの件数も含まれる。一方、出張相談件数とは、希望丘青少年交流センター「ア

ップス」と世田谷区役所4支所で相談を実施した延べ件数を示している。

令和6年度の延べ訪問相談・出張相談件数は311件であった。令和5年度と比較すると27

件微減したが、令和3年度と比較すると132件増加している。出張相談会場別件数については

次の表の通りである。

【令和6年度 出張相談会場別相談件数】

会場

相談実施件数

利用者（人数）

関係機関（人数）

合計

(人数)

メルク

リンク

メルク

リンク

メルク

リンク

希望丘青少年交流センター

「アップス」

2

0

2

0

0

0

2

北沢総合支所

5

0

5

0

0

0

5

玉川総合支所

1

0

1

0

0

0

1

砧総合支所

9

0

11

0

1

0

12

烏山総合支所

15

12

12

11

4

3

30

合計

32件

12件

31人

11人

5人

3人

50人

平成31年2月より、希望丘青少年交流センター「アップス」での出張相談を月1回定例で

実施しており、令和6年度の延べ相談件数は2件2名であった。また、各総合支所の区民相談

室における出張相談は42件48名の利用であった。令和5年度からは、「リンク」相談につい

ても、出張相談の活用を開始しており、令和6年度は利用者と関係機関を合わせた延べ相談人

数は12件14名であった。メルクマールせたがやと「リンク」から比較的距離の遠い、烏山地

域や砧地域の利用が多かった。

会場別相談件数の傾向から、烏山地域や砧地域などの遠方地域の出張相談のニーズが高い

と考えられる。遠方地域の場合、メルクマールせたがやへ来所するには、電車やバスを乗り

継ぎ、移動に長い時間を要する。外出が困難な方、健康面・体力面に不安のある方にとっ

て、電車やバスなど公共交通機関の使用は、相談につながるハードルを上げてしまう要因の

ひとつである。また、役所の担当課や関係機関が支援している方をメルクマールせたがやや

「リンク」につなぐ際、関係機関同席での相談者との顔合わせも提案しているが、定期的な

出張相談会が、相談者および関係機関にとっても、身近な場での相談につながっているとい

える。相談者にとっては関係性ができている支援者の同席で安心感を持ちやすく、また、支

援機関の重なり合う支援が始まる場所としても機能している。

上図に開所以降の年度別訪問相談実施件数を示す。令和6年度の訪問相談実施件数は261件

だった。上図から、令和3年度までと比較し令和4年以降は訪問相談件数が増加していること

がわかる。この結果は、令和4年度以降の訪問相談件数に「リンク」として対応した訪問相談

が加算されたことが理由と言える。メルクマールせたがや職員が「リンク」で対応した訪問相

談実施件数は、261件中72件(28%）であった。ひきこもり当事者の背景に様々な課題が複雑

に絡み合っている状況が多く見られる。当事者や家族の方などから支援機関へつながることが

難しい場合もあるため、支援や資源を届けるためにこちらから出向くことが必須である。

２)居場所支援

延べ居場所利用者数

令和6年度のメルクマールせたがやの居場所登録者数は、年度内に終結したケースを含めて

76名だった。延べ居場所利用者数には、登録制の居場所活動、居場所登録不要のオープンプロ

グラム、登録・相談不要のメルサポの利用者数が含まれる。令和6年度の居場所延べ利用者数

は1,196名で、令和5年度と比較して110名の減少となった。利用者数減少の背景には、これ

まで精力的に居場所活動へ参加していた利用者が、令和5年度以降から社会参加を試みるよう

になったことが影響していたと考えられる。また、相談件数の増加により、居場所の実施回数

が減ったことも一因である。登録者の活動参加日数を増やす働きかけをするとともに、人員増

加による活動日数の確保に取り組んでいきたい。

また令和6年度は、前年度に引き続き利用者自身が活動内容を企画していく「企画会議」を

実施した。利用者の希望から『メルクセッション（楽器の演奏）』や『マスコット作り』、モル

ックと人狼を組み合わせたオリジナルゲーム『モル狼』など、ユニークな企画が生まれた。他

にもFirst Step合同で『ゲーム企画』が行われるなど、利用者主体のプログラムを実施する機

会が増えた。

３)家族支援

家族会・出張セミナー参加者数

開

催

な

し

※出張セミナー実施月

6月、9月、11月、3月

令和6年度の家族会・出張セミナー延べ参加者数は286名であった。令和5年度245名と比

較すると41名増加となった。また、出張セミナーは、3月の斎藤環氏による講演が、参加者数

68名で最も多かった。

 9月と10月の家族会にて、家族交流会のニーズ調査を行った。その結果、回答者29名のうち

「ぜひ参加したい」「参加したい」と回答した方が23名だった。アンケートにも「交流会のみの

日も作ってほしい」という内容の意見をもらうことが多かったため、令和7年度は家族交流会の

みの企画もしていく方針である。

２．利用状況

１)相談登録者

以下には、令和6年度中に相談登録のあった558件の利用状況を示す。

①年齢分布

N=558

N=526

 相談登録における利用者の年齢分布を示す。20代が52%を占めており、中学生世代が1%、

高校生世代以上10代が18%、30代が24%、40歳以上が5%となっている。全ての世代にお

いて、令和5年度と大きな差はなかった。

②男女比率

N=558

N=526

 相談登録における男女比は男性が61%、女性が39%と、男性の割合が高い。平成26年度は

男性56%、女性44%だったが、男性の割合が増えており、平成29年度以降は6割以上が男性

となっている。また令和5年度と6年度とで男女比はほとんど同じ割合となった。

③年代別男女登録者数

N=558

 相談登録における年代別の男女登録者数は、すべての世代で男性が女性を上回っていた。

２)居場所登録者

年代別男女居場所登録者数

N=76

令和6年度の居場所登録者においては男女ともに20代が多い。また、20代の男女比は女性

の割合が高かった。

中学生世代の居場所登録者が開所以来いないことについては、中学校に在籍中であること、

支援機関として教育相談室、ほっとスクールなどの選択肢があり、メルクマールせたがやの居

場所利用のニーズが低いためと考えられる。10代の居場所登録は3名と令和5年度の1名と

比べて増加した。10代の居場所活動についてはp.35で述べる。

また、令和6年度は新規居場所登録者数が9名であり、令和5年度3名と比べて増加した。

３．相談登録ケースに関する分析

 以下に、令和6年度中に相談登録のあった558件に関するデータを示す。

１)ひきこもりなどの背景要因

N=558

相談登録ケースにおける背景要因を示す。この表は、相談登録558件の内、背景要因となる各

項目の割合を示している。「精神障害」「発達障害」は医師からの診断があるもの、「知的障害」は

愛の手帳を取得しているもの、「精神障害の疑い」「発達障害の疑い」「知的障害の疑い」について

は明確な診断がない、もしくは現在医療機関にかかっていないがそれらの障害が疑われたことが

あるものとしている。

多いものから、心理的要因の「自己肯定感が低い」が74%、「不安、恐怖感が強い」が70%、

「傷つきやすい」が68%、社会的要因の「対人関係の躓き」が67%、となっている。また、生物

学的要因では、疑いを含め「精神障害」が52%、「発達障害」が51%であった。

令和元年度より、ひきこもりなど利用者の抱える生きづらさについて、「生物・心理・社会モデ

ル」(p.76用語解説参照)に沿って各項目の割合を出している。ひとつの項目や領域に偏ることは

なく、利用者が抱えている背景が多様かつ複合的であることが示された。また、心理的要因の項

目は全体的に割合が高い一方、経済的困難が背景にある場合や、被虐待や家族関係(家庭内の不

和)の状況によっては別居の検討等が必要になることもあり、公認心理師や臨床心理士といった

心理の有資格者のほか、精神保健福祉士や社会福祉士など、多職種の視点で支援を考えていける

体制が有効と考えられる。さらに、社会的要因の「対人関係の躓き」が半数以上当てはまる。

心理的要因の割合が全体的に高かったが、生物学的要因、社会的要因なども確認されており、

ひきこもりの背景要因が複雑化・複合化していることが示された。メルクマールせたがやの居場

所活動は、スタッフに見守られながら対人交流の機会を取り戻し、やり直す場である。生きづら

さを抱えた方にとって、複合的な背景要因の改善・解消に向けた取組みであるといえる。

２)主訴分類

主訴分類とは、インテーク時点における申込み用紙への記載や話の内容を基に、相談員が主訴

と見なしたものである。

 令和6年度の相談登録558件の主訴を本人・家族で内容別に集計したところ、本人は就労・就

学(例：「今後の進路について」)が最も多かった。次いで対人関係(例：「人と関わる機会を持ちた

い」)が多くなっている。家族の主訴は家族関係が最も高く、次に就労・就学の割合が高かった。

 【令和6年度主訴分類】 【令和5年度主訴分類】

本人

家族

対人関係

92(26%)

62(15%)

健康面

32(9%)

14(3%)

生活面

70(20%)

34(8%)

就労・就学

125(36%)

140(34%)

家族関係

26(7%)

160(38%)

その他/不明

6(2%)

6(1%)

合計

351

416

本人

家族

対人関係

83(28%)

64(16%)

健康面

26(9%)

9(2%)

生活面

66(22%)

35(9%)

就労・就学

111(37%)

125(32%)

家族関係

11(4%)

154(40%)

そのほか/不明

1(0%)

1(0%)

合計

298

388

３)ひきこもり期間

N=318

上記のグラフは「ひきこもりなし(N=240)」を除外した318件におけるインテーク時点でのひ

きこもり期間の割合を示している。割合は「1～3年」が最も多く28%、次いで「7年以上」が

17％、「6ヵ月未満」と「3年～5年」が14%、「6ヵ月～1年」が12%となっている。「不明」と

は断続的にひきこもり期間が見られ、正確なひきこもりの経過を示すことができないものである。

ひきこもり期間が比較的短い3年未満の割合は、開所以来徐々に増加しており令和6年度は

54%の割合を占めた。ひきこもり状態が早期の段階で利用につながってきていると考えられる。

４)地域別分布

N=558

相談登録558件における居住地域一覧を示す。メルクマールせたがやの所在地が世田谷地域

であることもあり、世田谷地域から来所する利用者が31%と最も多く、次いで玉川地域26%

という順になっている。世田谷区の地域別人口の割合と比較すると、ほぼ同様の割合となって

おり、区内全域から利用につながっていると考えられる。

メルクマールせたがやの所在地から遠方にあたる烏山地域は、10%と最も利用が低い地域と

なっているものの、若者の地域人口比率から考えると一定数利用につながっていると考えられ

る。

５)相談のきっかけ

N=558

相談登録558件における相談のきっかけは、250件(45%)が「関係機関」からの紹介となって

おり、約半数を占める。この傾向は開所以来続いている。3番目に多かったのが「リンク」で、

63件(11%)だった。「リンク」でのインテーク後、メルクマールせたがやでの継続相談が開始され

たものや、「リンク」に問い合わせたことでメルクマールせたがやのことを知り、相談につながっ

たケースがこれに当たる。割合は11％ではあるものの、令和4年4月に開設して既に3番目の

多さとなっており、窓口開設の影響力の大きさがうかがえる。

紹介を受けた主な関係機関の内訳は以下に示す。

紹介を受けた関係機関一覧

就労支援機関

・若者サポートステーション

・障害者就労支援センターしごとねっと

・障害者就労支援センター ゆに(UNI)

・三茶おしごとカフェ など

区関係機関

・総合支所保健福祉センター4課

健康づくり課 生活支援課 子ども家庭支援課

保健福祉課(発達支援コーディネーター)

・障害保健福祉課 ・子ども家庭課

・基幹相談支援センター

・世田谷保健所 ・世田谷区児童相談所 など

教育機関

・中学校(教員、スクールカウンセラー)

・高校(養護教諭、ユースソーシャルワーカー)

・教育総合センター(スクールソーシャルワーカー)

・各教育相談分室

・大学学生相談室 など

その他

 ・ぷらっとホーム世田谷

 ・発達障害相談・療育センター「げんき」

 ・医療機関

 ・東京都ひきこもりサポートネット

 ・児童養護施設 ・医療少年院

 ・家族会

 ・地域障害者相談支援センターぽーと

 ・あんしんすこやかセンター など

６)不登校との関連

N=558

N=526

 相談登録558件における不登校経験の有無を示す。全体の65%が学齢期に不登校を経験して

いることが示された。平成28年度以降、7割前後の高い水準で推移している。

 ７)終結理由内訳

N=102

N=53

終結理由を6つに分類し、「就労」はアルバイトを含む就労に就いたもの、「就学」は学校への

進学・復学となったもの、「他機関利用」は、医療機関や別の支援機関などを主な利用先としたも

の、「転出」は、区外への転居、「その他」は利用者からの利用終了の申し出や1年以上連絡が取

れず音信不通状態で終結したものなどとした。令和4年4月より年齢上限が撤廃され、年齢(40

歳)到達を理由として利用終結に至ることはなくなった。

令和6年度における終結件数は102件で、令和5年度の53件と比べ約2倍に増加した。安定

した社会参加を送っている利用者の相談が終了したこと、何かあった場合のために利用登録のみ

を残していた利用者が問題なく生活を送れていることから終了の申し出があったこと、長期的に

来所がない利用者に連絡をとり継続意思や現状を確認して終結判断に至った件数が多かったこ

となどが影響していると考えられる。

終結理由内訳を見ると、「就労」が12％、「就学」が21%であった。令和5年度と比較すると、

「就労」の割合は低くなっているが「就学」の割合は増加しており、新規相談登録者の年齢分布

が中学生世代や高校生世代以上10代が約4割を占めていることにも関係がありそうである。

他機関利用(医療・その他）は令和4年度3件、令和5年度2件に比べ、18件と倍増している。

メルクマールせたがやでの相談支援や居場所活動を経て、他機関利用を主軸とできる段階に至っ

たとも考えられる。また、令和6年度は、生活上の困難等が確認され、ぷらっとホーム世田谷と

の2機関で対応が望まれるケースは、「リンク」に移行して支援を継続する流れが整備されたこ

とから、他機関利用の約4割を「リンク」が占めている。

メルクマールせたがやでは、初回相談(インテーク)後、その時点で継続相談利用の辞退がない

限り基本的に利用登録としている。しかしながら、利用者によっては初回相談後から連絡がつか

ないケース、悩み事が解決して有事再来としていたがその後音信不通になってしまうケースが一

定数ある。これらのことから、その他の割合は比較的高くなる傾向にある。

【終結件数102件】

終結理由

終結数

小計

就労（アルバイト含む）

12

34

就学（復学、転学含む）

22

他機関利用（医療）

3

18

他機関利用（その他）

15

他機関利用(リンク)

11

転出

12

その他（申し出など）

27

合計

102

【他機関利用先一覧】

せたがや若者サポートステーション

就労移行支援事業所

生活支援課

地域障害者相談支援センターぽーと など

就学による終結の校種内訳

中学

0

高校

6

大学

15

専門学校

1

令和6年度終結件数における、利用期間別の割合を以下に示す。

N=102

N=53

終結に至るまでの利用期間は、25ヵ月以上が68%と最も多かった。1～3ヵ月は1%、4～6ヵ

月は2%、7～12ヵ月は6%、13～24ヵ月以上は23%だった。

上記の結果から、ほとんどのケースで終結までに1年以上の期間を要していることがわかる。

メルクマールせたがやでは、音信不通の状態にあっても、最低6ヵ月以上は終結とせず、電話や

手紙などでアプローチを試みてから終結としていることから、1年以上の利用期間の割合が高く

なっていると考えられる。また、メルクマールせたがやの相談の中には、複合的な課題を抱えて

いるがゆえ長期間にわたる相談継続に至っているものがあり、「リンク」の開設により「リンク」

に移行していくケースも一定数見られている。また、「リンク」で生活上の困難に一定のメドがつ

き、ぷらっとでの支援の比重が低くなり、メルクマールせたがやでの支援に移行するケースもあ

る。

４．ティーンズサポート事業

平成28年度より、早期支援・早期介入を目的として10代の若者への支援に注力するべく開始

したティーンズサポート事業について示す。令和6年度に新規相談登録された本人年齢が10代

のケースは35件で、令和5年度よりも11件少なかった。

１) 10代新規相談登録件数の内訳(インテーク時点)

N=35

N=46

令和6年度における10代新規相談登録35件の内訳は、「家族のみ」が最も多く60%となって

いる。令和5年度と比較すると、「家族のみ」と「本人のみ」が減少し、「本人・家族」の割合が

増加した。

また、10代新規相談登録35件の相談のきっかけは下の表の通りである。令和6年度はネット

を見た件数が7件と最も多かった。次に多かった相談のきっかけは、「リンク」で6件だった。

【令和6年度10代の新規相談登録の相談のきっかけ】

きっかけ/機関名

件数

きっかけ/機関名

件数

教育相談室

5

医療機関

2

スクールカウンセラー

0

親・知人

0

中学校

0

ネット

7

高校

0

チラシ・区報

4

区内関係機関

5

ひきこもり相談窓口「リンク」

6

児童相談所

1

家族会

3

子ども家庭支援課

その他

2

２)10代新規相談登録件数における年齢分布

N=35

N=46

 10代新規相談登録における利用者の年齢分布は、中学生世代が8%(3件)、高校生世代が66%(23

件)、19歳が26%(9件)だった。

 毎年度、区内公立中学校全生徒に向けティーンズサポート事業のチラシを配布している。また、

令和6年度は切れ目なく支援を引き継ぐことを目指し、区内公立中学校に配置されているスクー

ルカウンセラー連絡会に出席して事業紹介や、中高生支援者懇談会等に参加することで児童館等

との連携強化に努めてきた。中学生世代の保護者からは、中学卒業後の相談先がなくなってしま

う、高校入学後どのように子どもを見守っていけばいいのか、といった不安や心配の声と同時に、

メルクマールせたがやがあると知って安心したという声も聴かれた。教育相談室での相談を継続

しながら、メルクマールせたがやへの個別相談を開始し、重なり合うような形で支援・相談を引

き継いでいった例もある。

義務教育終了が支援の切れ目ではなく、新たな相談先や支援につながるタイミングとなるよう、

今後も中学生世代の保護者とのつながり強化、教育機関との連携強化に力を入れていく。

 ３)平成28年度以降10代相談登録件数におけるインテーク時在籍内訳

 ティーンズサポート事業を開始した平成28年度以降の10代相談登録件数におけるインテー

ク時の在籍内訳を以下に示す。

N=323

N=35

 ティーンズサポート事業開始以降、10代の相談登録件数323件のうち、高校が31%と最も多

く、通信制高校と合わせると55%と半数を占めた。

一方、「在籍なし」が22%で、学校という10代の若者の社会生活の場から所属がなくなった若

者も利用しており、地域における高校生世代への支援と中学校卒業後に所属のない若者が再び社

会とつながるための支援が必要であるといえる。なお、令和6年度の「通信制高校」は、平成28

年度以降登録者インテーク時在籍に比べて高かった。

N=13

また、令和6年度10代新規相談登録のうち、在籍なし及び通信制高校・通信制大学在籍を除

く13件の登校状況は、不登校が54%(7件)、登校が46%(6件)であった。不登校の内訳を見ると、

高校が57%(4件)となっており、高校世代の不登校に対して、在籍中から利用につながるケース

が多いことがわかる。

４)10代延べ相談件数・延べ居場所利用者数

 ①10代延べ相談件数

令和6年度10代の延べ相談件数は、メルクマールへ来所しての相談、家庭への訪問や出張

相談を合わせて月平均62件だった。ティーンズサポート事業を開始した平成28年度の月平

均29件と比べ、約2倍の増加となった。

②10代延べ居場所利用者数

 令和6年度10代の居場所延べ利用者数は、80名であった。令和5年度は16名であったの

に対し、64名増加した。

 メルクマールせたがやでは、10代の若者だけが参加可能なプログラム「Teen’sTime」を令

和3年度より月に二回、定期開催している。メルクマールせたがやの居場所は10代から30代

まであらゆる年代の利用者が集まる、多様性が受け入れられる場である。10代の若者がお兄さ

んお姉さん世代を頼りに居場所へ馴染んでいく様子も見られ、頼り頼られるという関係が自然

とできやすい。

一方Teen’sTimeは、同世代だけということからフラットな関係が自然と構成されやすい。

あらゆる世代が集まる場とはまた異なる居心地の良さが、Teen’sTimeにあると考えられるた

め、今後もTeen’sTimeの利用者増加に努めたい。

③年代別利用者内訳

N=558

109

288

132

29

 上図に、令和6年度末時点での年代別利用者内訳を示す。10代は「本人・家族」と「家族

のみ」を合わせて90％(99件)と、家族利用の割合は他の年代と比べて最も高かった。このこ

とから、10代においては家族からの相談ニーズが高いことがわかる。世田谷区の場合、教育

相談室など教育支援機関の対象は中学生までのため、メルクマールせたがやは高校生世代以上

の10代が相談利用できる地域資源のひとつになっていると考えられる。また、所属のあるう

ちに利用につながることで、社会との接点が途切れることがないよう早期支援を開始できてい

るといえる。

メルクマールせたがやを利用する家族からは、「子どもも周りの目を気にするので、親が学

校で相談することは難しい」、「子どもが大きくなってきて、家庭のことをどこで相談したらよ

いかわからなかった」といった声が聴かれる。家族が相談し支えられることは、生きづらさを

抱える若者(子ども)本人の成長や自立を支えることにつながる。メルクマールせたがやでは、

若者本人だけでなく家族のサポートも若者支援に重要な側面と考え、引き続き取り組んでいく。

５)10代の若者に関わる他機関との連携

メルクマールせたがやでは子ども家庭支援課や中学校、高校など10代の若者に関わる機関と

の連携強化に取り組んできた。令和2年4月に世田谷区児童相談所が開設され、10代の若者に

係る支援において、連携の強化を図ってきた。

令和6年度に実施した10代の利用者に関する個別ケース検討会議を実施した機関一覧を以下

の表に示す。

【個別ケース検討会議を実施した機関】

ぷらっとホーム世田谷

健康づくり課

地域障害者相談支援センターぽーと

生活支援課

令和6年度に実施した個別ケース検討会議は4件だった。複数の支援者が関わっている場合、

支援者間の目標や足並みを揃えることが肝要である。個別ケース検討会議を実施することによ

り、アセスメントや支援方針などを深めることができ、より良い支援につなげられる。今後はよ

り積極的に子ども・若者支援協議会における個別ケース検討会議の機会を設けられるよう取り

組みたい。

Ⅳ

 支援効果

１．方法

２．結果と考察

Ⅳ．支援効果

令和6年度におけるメルクマールせたがやの支援効果について検証する。ひきこもり支援の領域

では、一人ひとりが望む形での社会参加が最終的な目標であるが、社会参加に至るまでの道のりは

時間がかかる場合が多く、その過程を含めて支援の効果を検証する必要がある。過去の事業報告書

では、①利用主体の変化、②利用者の社会参加に向けた変化、③利用者の他機関とのつながり、と

いう3点について検証した。そこで、令和6年度では①変化の起こる時期、②変化が起こる時期に

与える要因、という2点について検証する。

１．方法

１)モニタリングシート

 メルクマールせたがやでは、受理会議でケース登録が行われると、モニタリングシートを用い

て支援状況の把握に努めている。モニタリングシートには、現在の来所者の状況などとともに、

支援評価に関する項目がある(下記参照)。そこで、ケース台帳とモニタリングシートの支援評価

を分析の対象とし、支援開始からひきこもる本人の行動変容が起こるまでにどのくらいの期間が

かかるかを検証した。

モニタリングにおける支援評価

①本人に変化なし

②本人に家庭内で変化がみられる

③本人が支援機関につながる

④本人に自発的な行動がみられる

⑤本人が社会参加を試みる

⑥本人が安定した社会参加を維持

２)対象

 ケース台帳の中から、「令和6年度に相談登録されている」「2年以上支援が続いている」「モニ

タリングが行われるようになった2016年8月以降に相談が始まっている」の3つ条件をすべて

満たす相談者を対象とした。その結果、346件が抽出された。次に、モニタリング実施月から受

理会議月を引いた期間を「支援期間」と定義し、モニタリングシートから支援期間を算出した。

 最後に、支援期間を6ヵ月以内、7ヵ月以上12ヵ月未以内、13ヵ月以上18ヵ月以内、19ヵ

月以上24ヵ月以内、25ヵ月以上という5段階に区切った。そして、支援評価が初めて「①本人

に変化なし」以外の5項目が選択された時期を算出した。

２．結果

 以下には、分析対象となった346件に関するデータを示す。

１)支援期間と支援評価の変化

N=346

支援期間6ヵ月以内で支援評価に変化が見られたのは67%(223件)、7ヵ月以上12ヵ月以内

は15%(52件)、13ヵ月以上18ヵ月以内は4%(13件)、19ヵ月以上24ヵ月以内は2%(8件)、2

年以上は12%(40件)であった。

上記の結果から、メルクマールせたがやの約8割の相談者においては、支援開始1年以内に本

人に何らかの変化が生じていることが示された。一方、約1割の相談者においては、支援の効果

が見られるまで2年以上の時間を要することが示された。

２)支援に与える要因

①ひきこもり期間における比較

N=346

ひきこもり歴不明6件

次に、ひきこもり期間による比較を行った。来所時にひきこもり状態ではなかった群を「ひ

きこもりなし群」、ひきこもり歴が1ヵ月以上3年未満を「短期群」、ひきこもり歴が3年以上

を「長期群」と分類した。「ひきこもりなし群」は142件、「短期群」は123件、「長期群」は

75件、ひきこもり歴が不明だったのは6件だった。

 支援期間6ヵ月以内において、「ひきこもりなし群」で支援評価に変化が見られたのは

75%(106件)であった。一方、「ひきこもり長期群」においては55％(41件)だった。また、支援

期間25ヵ月以上において支援評価に変化が見られたのは「ひきこもりなし群」においては6％

(9件)だったのに対して、「長期群」では21％(16件)だった。

以上の結果から、ひきこもり歴が長くなるほど、支援効果が出るまでに時間がかかる可能性

が示唆され、早期介入の重要性が示された。

②初回来所時相談者による比較

N=346

初回来所時の相談者による支援評価の比較を行った。初回相談時に本人が来所したのは142

件、初回相談者が家族のみだったのは204件だった。支援期間6ヵ月以内において、初回から

本人が来所した群では81%(115件)で支援評価に変化が見られた。一方、初回相談者が家族の

みの群でも58%(118件)において、6ヵ月以内に支援評価に変化が見られた。家族相談のみの

場合においても、本人の行動変容に影響を与える可能性が示唆された。

③不登校歴による比較

不登校歴不明10件

N=346

不登校歴の有無について検討したところ、不登校歴がある群では216件、不登校歴がない群

は120件、不登校歴が不明だったのは10件だった。支援期間6ヵ月以内において、不登校歴

がある群では69%(149件)に支援評価の変化が見られたのに対して、不登校歴がない群でも

63%(76件)で変化が見られ、ほとんど変わらなかった。不登校歴と支援評価の変化との間には

関連がないことが示唆された。

④初回来所時他機関利用状況による比較

N=346

 最後に、初回来所時の他機関利用の有無で比較を行った。初回相談時に他機関を利用してい

る群は208件、利用していない群は138件だった。

 支援期間6ヵ月以内において、他機関利用している群では74%(154件)で支援評価に変化が

見られたのに対して、他機関利用していない群では57%(79件)だった。複数の機関につながっ

ている方が、支援評価に変化が生じやすいことが示された。

Ⅴ

 世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」

 １．概要

 ２．「リンク」における活動実績

３．メルクマールせたがやから「リンク」登録と

なったケースの特徴

Ⅴ．世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」

１．概要

 令和4年4月5日に世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」が開設され3年が経過した。誰もが

自分らしく暮らすことができるようサポートすることを目的に、メルクマールせたがやとぷらっ

とホーム世田谷が共同運営する窓口である。

 平成26年9月に開所したメルクマールせたがやでは、不登校やひきこもりなど生きづらさを

抱えた若者とその家族を対象に個別相談、居場所、家族会などを運営してきた。ぷらっとホーム

世田谷は、生活困窮者自立支援相談センターとして、経済的困窮をはじめ、あらゆる生活の困り

ごとを支援してきた。これまで、ひきこもりについては、若者はメルクマールせたがや、年齢を

問わない孤独・孤立などはぷらっとホーム世田谷が支援してきており、「リンク」は2機関がそ

れぞれ培ったノウハウを活かし、ひきこもりや孤独・孤立状態にある当事者と当事者に係る全て

の人と共に、その人らしい生活の再構築を目指している。

１)支援の流れ

上図は「リンク」における支援の流れを示したものである。最初の相談受付後、ぷらっとホー

ム世田谷とメルクマールせたがやのスタッフが複数名体制で初回相談(インテーク)を実施する。

その後、週1回開催のリンク検討会でぷらっとホーム世田谷、メルクマールせたがや、「リンク」

の所管課である生活福祉課からなる参加人数平均10名のスタッフ構成により、全ての初回相談

内容や最初の支援方針について検討を行う。ひきこもりや孤独・孤立の背景には、心理的課題だ

けでなく、生活面における課題も多く存在する。そのため、どちらかの機関だけの見立てではな

く、2機関それぞれの得意分野を生かし、多職種の視点も加味したうえで、世帯構成員及び世帯

全体の状況把握に努めている。このように、多様な視点から課題整理と支援方針を検討し、協働

体制で支援を進めていくこととなる。また、相談内容は多岐にわたることが多く、「リンク」内に

とどまらず、区内外の公的及び民間の社会資源や支援を必要とすることが多い。その場合、重層

的支援会議もしくは支援会議を開催し、様々な支援機関との協働体制を整える。

２)世田谷区のひきこもり支援ネットワーク

ダイアグラム

自動的に生成された説明 (正方形/長方形)

上図は「リンク」が連携・協働してひきこもり、孤独・孤立状態にある人をサポートする際の

イメージ図である。「リンク」では、世帯の抱える課題・問題に対して、多機関が共通の認識をも

ち「協働」することを基本としたうえで、それぞれの機関の強みを活かし多方面からアプローチ

する「機関連携」を、世帯状況に応じて、時期ごとに柔軟に組み立てていく。ひきこもり状態に

ある人とその家族が抱える多様な困りごとに対し、当事者とその家族を支援の中心におき、世帯

全体にとってよりよい暮らしのかたちを、支援機関がともに模索していく。そのため、このイメ

ージ図は段階的で一方通行のものではなく、必要な支援を複数機関が同時並行的に支援を進める

かたちが表されている。

３)ひきこもり・就労支援部会、8050部会への関与

令和4年3月に社会福祉法第106条に基づき、ひきこもりなど複合化した課題を抱える方及

びその家族に対する適切な支援を検討する「世田谷区重層的支援協議会」が設置されたことに伴

い、令和5年度よりひきこもり・就労支援部会が子ども・若者支援協議会から本協議会に移管さ

れ、8050支援部会が新設された。

令和4年度までメルクマールせたがやがひきこもり・就労支援部会の事務局を担ってきたが、

令和5年度からは、ひきこもり・就労支援部会と8050支援部会の事務局をぷらっとホーム世田

谷が担っている。メルクマールせたがやは、「リンク」の構成機関として、上記2つの部会で扱

うテーマなどをともに考える役割を果たしている。どちらの部会においても、支援の狭間に落ち

やすい層への支援について考えられるよう内容を工夫している。

ひきこもり・就労支援部会では、自立を就労に限定せず「その人らしく生きる」ことを重要な

視点と位置付けた上で、「就労」をキーワードに各機関が集まり、「その人らしく生きる」ことを

共通基盤とした上で、支援ネットワークの構築を主な目的としている。

令和6年度の8050支援部会では、第1回目は部会委員以外の方にも対象を広げ、東邦大学大

学院の岸恵美子教授を招き、社会的孤立・セルフネグレクトについての講演会を開催した。第2

回目は第1回の岸先生の講演会をうけ、今後の社会的孤立・セルフネグレクトへの対応について

全体協議を行った。グループワークでは各機関が抱える対応への困難さが共有され、部署を越え

て対応の検討を考えていく必要がある課題として改めて認識が共有された。

なお、令和7年度は、ひきこもり・就労支援部会は閉会され、重層的支援協議会における実務

者会議等の位置づけの見直しがある予定になっている。

【重層的支援協議会説明図】

ダイアグラム

自動的に生成された説明

２．「リンク」における活動実績

「リンク」における支援の流れ(p.46)にあるように、2機関でインテークを実施した後、リンク検

討会にて相談内容や利用者のニーズに応じて①2機関(「リンク」登録) 、②メルクマールせたが

やのみ、③ぷらっとホーム世田谷のみ の中から継続相談の担当を決めている。

 メルクマールせたがやは、インテーク及び上記①、②で相談対応を行っているほか、③につい

ても専門的なサポートを求められる場面で面談などに同席することがある。

１)当事者年齢別/支援機関属性（令和6年度）

リンク検討会で検討後の、主に相談対応する機関別の相談世帯数は以下の表の通りである。

4月

5月

６月

７月

８月

９月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

合計

10

代

リンク

1

1

2

ぷらっと

0

メルク

3

1

4

20

代

リンク

1

3

2

1

3

3

13

ぷらっと

1

1

メルク

1

1

2

4

30

代

リンク

2

2

1

1

2

2

3

4

2

4

4

4

31

ぷらっと

0

メルク

0

40

代

リンク

2

1

2

2

3

1

1

12

ぷらっと

0

メルク

0

50

代

リンク

5

2

1

2

2

3

4

1

5

2

1

28

ぷらっと

0

メルク

0

60

代

以上

リンク

1

1

2

1

1

6

ぷらっと

0

メルク

1

1

合計

リンク

8

7

5

8

6

5

7

9

12

10

6

9

92

ぷらっと

0

0

1

0

0

0

0

0

0

0

0

0

1

メルク

1

0

0

0

3

3

0

0

0

0

2

0

9

総計

9

7

6

8

9

8

7

9

12

10

8

9

102

「リンク」でインテーク実施後、継続相談となった102世帯のうち、主に相談対応する機関の

登録状況は2機関対応の「リンク」登録が92件(90%)となった。生活面への支援に加え、心理面

への支援を必要とする相談が大半を占めることがわかる。「リンク」の新規登録のうち、1件を除

くケースにメルクマールせたがやの相談担当者が対応している。その他、「リンク」登録の92件

に加え、インテーク実施後に登録にならず保留・単発相談で終了したケースが17件あり、今年

度の新規相談件数は119件であった。「リンク」初年度の新規相談件数が、令和4年度193名、

令和5年度143名、令和6年度119名と推移しており、「リンク」開室後3年が経過し新規相談

件数が落ち着いてきた印象がある。結果として、「リンク」からメルクマールせたがやにつながる

ケースの減少、メルクマールせたがやの新規相談数の減少にも連動していると考えられる。

２) メルクマールせたがやの相談件数に占める、「リンク」相談件数の割合

今年度、メルクマールせたがやのスタッフが、「リンク」で対応した相談ケース1,184件は、

メルクマールせたがやの延べ相談6,334件のうち、約19％を占める。平均すると毎月約100件

の「リンク」相談を実施している。

令和6年度の「リンク」対応の延べ相談件数は、令和4年度の507件、倍増した令和5年度

1,021件からさらに微増している(p.14)。

３)「リンク」経由でメルクマールせたがやのみ相談登録となったケースに関する分析

 「リンク」で実施したインテークの後、メルクマールせたがやのみで担当をつけることになっ

たケース(前項②にあたる)に関する分析を以下に示す。

①年齢分布

N=9

令和6年度「リンク」でインテークを実施したケースのうち、メルクマールせたがやのみで

担当することになった新規相談登録は9件で、メルクマールせたがや新規相談登録85件のう

ち11％を占めている(令和5年度12％)。年齢分布は、10代、20代が4名ずつと同数で、若い

層で生活上の支援比重が低い相談者である。60代以上の相談者をメルクマールせたがやが主

で相談対応するのは、令和4年度以降初めてのことであるが、生活上の困難はなく、ぷらっと

ホーム世田谷の支援内容を利用する状況になかったことからメルクマールせたがやのみの登

録となった。

「リンク」経由で、令和4年度は29件、令和5年度は13件の若者層の新規登録があった

のに比べ、令和6年度は8件とさらに減少傾向にある。開室からの経過による新規相談件数の

減少、「リンク」の電話受付時の相談内容の聞きとり段階で、直接メルクマールせたがやのイン

テークにつながったケースが複数あり、受付時の対応窓口の振り分けが進んでいることや、直

接メルクマールせたがやに申し込みをしている利用者が多いと考えられる。

４)「リンク」相談の出張相談会の活用

出張相談はこれまでメルクマールせたがやへの相談を希望する方を対象としていたが、令和5

年度からは、「リンク」相談についても、各総合支所の区民相談室を利用した出張相談の活用を開

始した。「リンク」相談の場合、基本的にはぷらっとホーム世田谷(就労支援のパソナ職員含む)と

メルクマールせたがやの2機関で対応している。

令和6年度は、利用者と関係機関を合わせた延べ相談人数は12件14名であった(令和5年度

は5件)。内訳は「リンク」の新規相談が1件、関係機関からの「リンク」新規相談が1件、関

係機関との利用者の情報共有が3件、継続相談が6件であった。「リンク」への来所が困難な方

への対応や、役所内手続き時の同行が必要な方に有効に活用していただけた。

 ３．メルクマールせたがやから「リンク」登録となったケースの特徴

 令和6年度は、メルクマールせたがやを経由して9名が「リンク」登録となった。うち2名

は、メルクマールせたがやへの初回相談電話にて、相談主旨の聞き取りをした際に、将来への不

安、お金の不安、就職活動への希望などが主訴だったため、「リンク」のインテークにつなぎメル

クマールせたがやは未登録である。令和6年度、メルクマールせたがや利用中に「リンク」の登

録になった7名の内訳は本人が3名、家族が4名であった。件数が少ないため、ケースの特徴を

令和5年度に抽出した【「リンク」登録となったケースの抱える課題】に累積する形で列記する。

 【「リンク」登録となったケースの抱える課題】

 「リンク」登録となったケースの特徴は、以下の表のとおりである。これらの課題がひとつで

はなく、複数絡み合っていることも「リンク」登録となったケースの特徴である。

課 題

説 明

経済問題

・低収入や債務などにより、家計が逼迫している

・生活保護受給で一人暮らしだが、金銭管理が困難 ・相続問題

家族が区外在住

・家族や親族が遠方在住で本人と接点を持ちづらく、本人の生活状況がつかめない

暴言・暴力

・家族への暴言・暴力、物の破壊行為がある

・同居継続が困難な状態

ダブルケア問題

・本人以外の家族にも障害や介護の問題があり、家族への支援も求められている

連携問題

・本人または家族が複数機関に相談しているが、支援方針が定まらない状態

医療の課題

・精神的な不安定さを抱えているが、状況の改善が図れずにいる

・医療の必要性について、検討が必要な状況

住居問題

・家族関係のバランスにより、本人の一人暮らしの検討が必要

・将来の生活を考えた際、家の売却や転居の検討が必要

・経済状況の悪化により、転居せざるを得ない状況

社会保障の活用や高齢サ

ービスなどの導入

・本人が働くことが難しく、障害年金の申請を検討している

・世帯支援の切り口として、高齢サービスなどの導入検討が必要

・生活保護申請の検討が必要

長期化による本人・家族の

高齢化及び疲弊

・関係機関にもつながり継続利用しているが、家庭内に変化が見られず、ひきこもりが

長期化し本人・家族が高齢化及び疲弊

上記の課題から浮かび上がるのは、ひきこもりの当事者だけでなく、世帯内で困難や生きづら

さの要因が複雑に絡み合っているということである。支援が必要な世帯であっても、当事者やそ

の家族が支援を求めつつも変化に強い不安をもつ場合や、第三者に助けを求める発想に至れず

SOSの発信が難しい場合において、支援の手が届かず行き詰ってしまうことがある。世帯全体が

多様で複雑な困難さや生きづらさを抱え、支援内容が多岐にわたる場合、「リンク」の支援で知恵

を出し合い強みを活かすことで、地域の関係機関との協働を円滑に進めやすい。

また、多機関による支援を必要とする場合は、支援会議(p.44参照)で分野を横断した支援や協

働のあり方を検討している。「リンク」開設から3年経過し、複合的課題を抱える世帯への対応

の蓄積が徐々に進み、分野の垣根を越えた重層的支援を通じ、従来型の支援や制度の狭間で支援

が届きにくかった方々への、より良い支援体制の構築が少しずつ進んできている。

Ⅵ

 事例報告

１．過去の人間関係に傷ついていた本人が居場所利用につながった事例

２．家族面接から本人への訪問相談を導入した事例

３．長期にひきこもっていた本人が居場所利用を通して変化のあった事例

４．家族面接を通して、家族と本人の変化がみられた事例

５．困窮した高齢の親から「リンク」相談につながり、本人の自立を促した事例

Ⅵ．事例報告 ※ プライバシー保護のため、内容は加工してあります。

１．過去の人間関係に傷ついていた本人が居場所利用につながった事例

・相談者：本人、母親 ・性別：女性 ・ひきこもり歴：あり

・年齢：20代 ・主訴：外出する機会を持ちたい

 本人は20代の女性。メルクマール(以下：メルク)には、通院先の大学病院精神科の主治医に

勧められて母親と来室。軽度の自閉症スペクトラムとパニック障害の診断で服薬中。メルクで

の相談は2～3週間に1回の頻度。最初は母親と来室し、2回目以降は母子並行で相談を実施。

母親相談では、本人のペースを大事にすること、母子の距離感が近いことがテーマに挙がっ

た。

 一方、本人面接では、好きなゲームやアイドルの話題が中心であった。本人の好きなことを

ずっと喋っており、相談では笑いが絶えないが、中学の頃の話や本人の気持ちの話になると神

妙な面持ちになり黙り込むことが多かった。それでも本人は、中学2年生のときにクラス内で

の人間関係のトラブルをきっかけに不登校になったこと、周りに合わせるのに疲れてしまった

こと、通信制高校で何とか高卒認定を取得したことなどを相談員に語った。

相談員は、まずリソース（資質・資源）探しなどを通して、自己肯定感を高めることから始

めた。また、自らの意思での外出先がなかったため、目的を持った外出が出来ると良いとの主

治医の提案で、メルクの居場所に登録した。1対1での会話は問題ないが、大人数での雑談に

なると誰が何を喋っていて、何を聞かれたか分からなくなり会話に困ってしまうことがあるた

め、居場所利用には抵抗があった。また、長時間の電車やバスの利用は難しいため、通い続け

るのも不安があった。

しかしながら、居場所に参加して最初の数回は緊張して他の利用者の話を聞いているだけで

あったが、居場所スタッフがいる安心感から徐々に自分の意見も言えるようになり、自ら他の

利用者に質問も出来るようになって来た。相談の中で、相談員が＜この間の居場所はどうだっ

た？＞と聞くと、「楽しかった」「自分から質問ができた」などとポジティブな答えが返って来

ることが多くなった。最初は週1回のペースでの参加だったが、半年が経過した頃からフリー

プログラムに参加したり、外出イベントにも参加できるようになった。その頃から、母親との

距離も取れるようになり、“居場所に参加して疲れたから母親の用事には付き合えない”と母親か

らの誘いも断れるようにもなった。

また、同年代、年上の利用者やスタッフとの関わりから「自分もここにいて良いんだ」、とい

う安心感が得られたようである。さらには、他の利用者がアルバイトを始めたとの話を聞き、

「これからアルバイトをしてみようかな」と前向きな発言も聞けるようになって来ている。

居場所での人間関係を通じて主体性を取り戻し、家族関係に変化が見られたり社会参加に対

して前向きに考え始めた事例である。

２．家族面接から本人への訪問相談を導入した事例

・相談者：本人、両親 ・性別：男性 ・ひきこもり歴：あり

・年齢：30代 ・主訴：自立したい

本人は30代男性。中学生の頃から不登校となり、その後公立高校へ入学するも中途退学。い

くつかアルバイトを経験するがすぐに辞めた。父親がある時若者総合支援センターの出張セミナ

ーに参加し、家族だけでも相談する大切さを知り、メルクの相談来所に至った。

両親相談では、本人がほとんど毎日を自宅で過ごし、家族以外と接する機会がないことが語

られた。ふとしたタイミングを見ては、両親が「アルバイトすればいいのに」と声をかけをし

てみても、本人からは煙たがられるだけだった。そんな本人に対して、両親はあきらめの気持

ちと腫物に触るような思いが強いようだった。

両親からメルクの訪問相談を提案した当初、本人は全くの無反応であった。両親の理解では、

本人は拒否の時ははっきり回答するタイプであるという。これをもとに、本人に訪問の日付と、

本人が拒否をすれば無理に訪問相談を実施しないことを事前に伝えてもらい、メルクの訪問相談

を開始した。初回訪問時、母親と共に本人が訪問相談員を出迎えた。訪問相談員はメルクの施設

案内と、会ってくれたことの感謝を伝えるに留め、本人宅を後にした。その後の両親面接では「も

っと本人に仕事を始めるよう説得してほしい」という思いが話されたが、本人が訪問相談員と信

頼関係を築く為に焦らず見守る、本人が話しやすい環境づくりに努めることを勧めた。

訪問相談は月に1回続けられた。本人が話をしやすいように、両親は挨拶だけをして席を外す

ようになっていた。本人からは少しずつ雑談や表情が増え、訪問を開始して1年程経った頃、ア

ルバイトをやろうと思ったが、怖くてできなかったと話し始めた。中高生の頃のいじめられた経

験や、以前チャレンジしたアルバイト先で職員に強く叱責された経験がきっかけで、「同世代に

比べて自分は何も経験がなく、落ちこぼれで何もできない」と思うようになり、ひきこもること

で益々その思いは強まったという。両親に対しても「何もできない自分」でいることの申し訳な

さがあり、今まで話せずにきたようであった。一方で「何か始めなければ」という思いもあった

ことから、メルクの訪問相談を拒否しきれなかったのだという。また「以前の親はいつ『働け』

と話をしてくるかわからず、何と答えようかと怖くて話ができないときもあった。訪問相談員は

無理には家に来ないと言ってくれたし、いつまでたってもアルバイトしろとは言ってこないので、

自分の話を聞いてくれると思った」という。

訪問相談員は、他人と多くは関わらずにできる仕事を探す手伝いと、仕事の前に人と関わる練

習をしてみることの2つを提案した。また、人と関わることの苦手さがある中で、メルクの訪問

相談を受け入れてくれたことを労った。その後本人から仕事探しの希望が出されたため、訪問相

談を継続しつつせたがや若者サポートステーションを紹介。スムーズな利用となるよう訪問相談

員の相談同行と引継ぎを行った。現在、本人は郵便の仕分けや製造工場の組み立てなどに興味を

持ち、せたがや若者サポートステーションでの面接を開始している。

家族それぞれの思いをうまく伝えられず膠着状態となっていた家庭に、訪問という新たな風が

通されたことで少しずつ本人の思いがくみ取られ、変化が生じた事例である。

 ３．長期にひきこもっていた本人が居場所利用を通して変化のあった事例

・相談者：本人 ・性別：男性 ・ひきこもり歴：あり

・年齢：30代 ・主訴：退職後ひきこもっていた。今後どうすれば良い

か

本人は30代の男性。大学を卒業後一般企業に就職したが、1年で退職、その後8年間ほど自

宅中心の生活を送っていた。通院先の主治医に勧められて来所した。

 大学での成績は優秀だったが、もともと不器用で対人関係が苦手な面があり、仕事でのミス

が重なって、周囲からひどく責められていると感じるようになった。恐怖を感じて出社できな

くなり退職。退職してしばらく経ってから心療内科に通院し始め、最近になってやっと調子が

安定してきたと言う。本人は初回相談の中で、「自分は周囲の人たちより劣っている、今でも

時々死にたい気持ちになることがある。メルクには居場所というものがあると聞き、そこで対

人関係の練習をしたい」と言った。本人の、相談での率直な語りや、人と関わりたいという希

望に対して、担当相談員は可能性を感じつつ、一方で死にたい気持ちがあるため慎重に対応す

べきと考えた。本人の了解のもと主治医と連絡を取り合い、相談で注意深く本人の状態を確認

しながら、居場所の見学や体験を経て無理のないように居場所を利用することとした。

 居場所利用開始当初の相談では、参加しても周囲と上手く関われず、「勇気を出して言った

ことが失敗だった」、「やはり自分はダメなんだ」という発言が多かった。居場所でのやりと

りを本人から確認すると、本人が思うほど場違いな訳ではなく、もっと良くありたいという気

持ちの表れのようだった。本人の発言やその時の気持ち、発言が他の居場所利用者にはどう見

えるかなどを具体的に検討した。しかし体調が整わないこともあり、コンスタントな利用には

至らなかった。

 利用開始から1年が経ち、居場所での会話を聞くのが楽しくなったと言うようにはなったが、

自分は劣っているという思いは消えなかった。この時期本人にとって居場所は、素晴らしい人

たちがいる理想的な場所で、自分にとっては、無理をして“チャレンジする場”であった。

 更に数ヶ月経つと、治療の効果があって体調が整い、居場所のスポーツイベントなどにも参

加できるようになった。このイベントは会話の細部にこだわることなく純粋に楽しめるようだ

った。次のイベントを楽しみに待つようになると、本人にとって身近に感じていた死よりも、

未来の予定の実現を願うようになり、「死にたいと思うことがほとんどなくなった」と言っ

た。普段の活動でもその場にいることが苦にならなくなったとも言い、本人にとっての居場所

が“チャレンジする場”から“楽に参加できる場”へ変化したことが認められた。

 居場所利用者との関係ができてくると、他の利用者から言われたことでストレスを感じるこ

とも、反対に支えられた気持ちになると変化してきた。他の利用者を理想化することが少なく

なり、多様な面を持つ人として認識するようになった。同時に自分は劣っていると言うことが

減り、居場所での発言にも個性が滲み出るようになった。居場所が“自分らしくいられる場”

に変化したようだった。この頃から将来について意識するようになり、障害者就労について調

べたり、パソコンを学び直したいとせたがや若者サポートステーションに登録するなど、動き

始めた。

 長期のひきこもりから本人の状態を見極めながら相談と居場所を利用したことにより、本人

にとって他者との交流の場の居場所の意味が変化していった事例である。

 ４．家族面接を通して、家族と本人の変化がみられた事例

・相談者：両親 ・性別：男性 ・ひきこもり歴：あり

・年齢：20代 ・主訴：バイトや就職活動をしてほしい

本人は20代の男性。両親と本人、妹の4人で同居をしている。本人は大学2年時に休学をし、

その後ひきこもりがちになった。両親は、初めは本人に外出などの働きかけや声掛けをしていた

が、本人が両親を避けたり不機嫌になったりするようになり、対応を変えて声掛けなどを減らし

た。しかし、本人に変化が見られないこともあり、将来への不安が大きくなった両親がそろって

メルクの初回相談に来所した。

両親によると、本人は出生時や成育歴上で大きな問題や病気はないようだった。学校の成績は

良く、静かなタイプの子どもで友人関係もあった。小学校卒業後に中堅の中高一貫校に入学し、

そのまま中学、高校を卒業。大学受験では自分で志望校を決められず、両親や塾の先生が薦めた

大学を受験してそのうちの一つに合格して入学をした。大学ではサークルには入らずバイトもし

ていなかったが、授業にはまじめに出ていて単位も取れていたようだった。2年生になると徐々

に遅刻をする日や家にいる日が増え、そのうちに家から出ない日が続くようになった。心配した

両親が本人と話をすると、大学に行きたくないと話し、結局大学を休学する事になった。

来所時の本人の様子は、1日のほとんどを自分の部屋でゲームをしたり動画を見たりして過ご

しており、外出はコンビニに買い物に行く程度だった。身だしなみは乱れてはいなかったが、1

時間以上入浴したり、外出の準備に30分以上の準備をかける様子があった。両親は様子見のた

めに毎日本人の自室に入り、妹は仕事をしない本人に厳しい口調で責めるため、本人は家族を避

けて過ごしていた。食事も家族がいない時間帯に一人で食べていた。両親は、関わり方を本など

で学んでいるが、本人への心配や今後の見通しへの不安が強い様子だった。

両親相談において相談員は、まず本人を心配する両親の気持ちを受け止めるよう心掛けた。一

方で、本人の自室に入ることを止めたほうがいいこと、精神科医による治療が有効な場合がある

ことなどを指摘した。さらに、子どもたちの自立や“巣立ち”に向けた変化への準備として、両

親に老後の在り方の探索や試行を促した。

その後、両親は不安を抱えながらも、自分たちの趣味や活動に集中する時間を増やしたり、本

人の自室に入ることを止めるなど、本人との距離を変化させることに取り組んだ。また妹とも話

し合い、妹の思いを聞く時間を作るようになった。

しばらくすると、本人が食器洗いなどをするようになったこと、両親と会話する機会が増えて

きたことなどが報告されるようになった。また妹が兄を避ける様子は変わらなかったが、両親と

の会話で兄の苦労や辛さを理解するような言葉が表れるようになったという報告もあった。また、

本人が変わらないことへの不安はあるが、以前よりもその不安があっても生活できるようになっ

てきたという、両親らの変化も語られた。

本人の自立にはまだ時間を要するが、本人の変化や、本人を支える家族の変化が見られたこと

から、今後に良い経過が期待できる事例である。

５．困窮した高齢の親から「リンク」相談につながり、本人の自立を促した事例

・相談者：本人、母親 ・性別：女性 ・ひきこもり歴：あり

・年齢：50代 ・主訴：高齢の親が支えきれない不安

 本人50代の女性。80代の父親と70代の母親と同居。姉は遠方の他県で家庭を持っている。

本人は短大卒業後に就職活動をするも正規雇用での採用を得ることができず、アルバイトや派遣

で30代まで転々と働いてきたが、度重なる職場でのパワハラに耐え兼ね退職。そこから20年近

く実家で必要最低限の外出しかしない状態。家では昼夜逆転した生活をしており、家族が声をか

けても無視か、機嫌が悪いと両親に暴言を吐くため、なるべく関わらないような生活を送ってい

た。しかし、両親が高齢になったこと、父親の認知症が進行して介護が必要なこと、母親自身の

体調不良等が重なり、母親は徐々に本人を支えられるか不安を感じるようになった。父親の介護

のことで地域包括支援センターにつながり、そこで家庭状況を相談する中で「リンク」を知った。

メルクでの母親相談では、両親の高齢化と健康不安、さらに経済的困窮も進んでおり、母親の

精神的負荷はかなり強い印象だった。母親には、今まで心細い中で耐えてきたことを労うととも

に、本人の年齢が40歳以上であること、生活困窮もあることを考慮して、「リンク」として相談

を開始することを伝えた。「リンク」での母親相談では、このまま本人を養い続けることの限界を

感じている一方で、本人を変えることへの諦めと本人と関わる怖さがあり、身動きが取れない状

況になっていることがわかってきた。また、母親自身が重度のうつ状態であることもわかってき

て、まずは母親に心療内科への受診の必要性を心理教育し、受診につなげ、母親の薬物治療を開

始した。その中で徐々に母親に前向きに動いていこうという考えが生まれ、もう一度本人と向き

合って話してみようと思い直した様子だった。しかし、母親が本人と話そうとしても強い拒絶で

対応されるため、手紙をしたため何度か部屋の前に置いておくと、それは読んでいるようだった。

その手紙の中で、このまま経済的に支えて行くことが難しいことと両親の健康不安のことを伝え

た。また母親は相談の中で、本人が退職して閉居し始めた当初、姉と本人を比較してたびたび叱

責してしまったことを後悔しており、そのことに関する謝罪も手紙で伝えた。並行して母親相談

の中では、本人に世帯分離をしてもらって生活保護を取得してもらう方向性で進め、期限を伝え

て家から出て1人暮らしをしてもらいたいことも手紙で本人に伝えた。

それでも、1人暮らしの期限の半月前まで家では顔を合わせない状況が続いていたが、ある日

に本人がリビングに降りてきて、「住むならこのあたりが良い」と意見を言うようになった。それ

をきっかけに親子の会話が生まれるようになり、少しずつ母親の手伝いをするようになってきた。

親子関係は良くなってきたものの、本人が働くにはまだ心理的抵抗感がかなり強く、やはり予定

通り世帯分離をして本人は生活保護を申請し、同じ区内で生活することとなった。その中で、本

人としても「働きたいが過去の経験から働くことが怖い。どこか相談できる場所はないか」と母

親に話したそうで、本人も「リンク」の相談につながった。本人の担当者は1年程かけてじっく

り過去の体験の傷つきを丁寧に傾聴していく上で、担当者とは緊張なく話せるようになってきた

が依然として働くことへの不安は強い様子だった。本人にも医療での治療の必要があることと手

帳を申請して障害者就労という選択肢があることを説明し、医療受診と就労支援を目指している

最中である。高齢となり子どもを支えるエネルギーが枯渇していた親をまず支えつつ、家族全体

を社会資源につないでいくことで本人の自立が進みつつある事例である。

Ⅶ

 メルクマールせたがや利用者の声

 １．アンケート結果

２．本人の声

３．家族・その他の声

Ⅶ．メルクマールせたがや利用者の声

１．アンケート結果

＜回答者内訳＞

＜回答者年齢内訳(本人)＞ ＜本人年齢内訳(家族回答)＞

＜利用期間＞ ＜総合的満足度＞

２．本人の声(一部校正あり)

＜メルクマールせたがやを利用して良かったこと、役立ったこと、変化を感じたこと＞

家族との付き合い方のアドバイスをもらい、適切な距離を保ちながら会話できるようになった。

毎週外に出られるきっかけになっている。

家族以外の人間関係を築くことができ、また病院以外の外出の機会が増え、とてもありがたいです。

どう生きたらいいのか路頭に迷っていたんですが、メルクマールに来てから人生の目標が定まって毎日

が生きやすくなりました。

細かくお話を聞いていただけるので、自分を見つめ直し、客観視出来るようになりました。

自分の考え方は、他の人よりも偏っていること、バランスが悪いことに気づかせていただきました。も

っと楽しく生きてもいいと言われ、驚きました。自分の、自分に対してだけ向けられている厳しさを、

うまくコントロールして、よりよい人生を送りたいと思います。

心にひっかかったことを相談できたり、話していて楽しい気持ちになれた。

家族でも友達でもない方に話を聞いてもらえることによって、客観的な視点や安心感を得られて気持ち

が整理されたり落ち着いたりする感覚があります。

話せる場所が増えた。行くのはめんどくさいが、楽しい。

大学卒業後の自分に合う働き方について、わからない事・不安な事を相談させてもらっている。

メルクで出会った人と居場所以外で交流する機会ができた。

信頼できる人が増えた。

生活リズムが良くなり、前より人と話すようになった。

人との会話する機会が増え、一人の時間か減った

以前より自分の意見を伝えることができるようになった。

色々な利用者がいるのだと思いました。少しずつプログラムに参加するようになりました。

＜今後、改善してほしいこと、取り組んでほしいこと＞

電話が苦手なのでネットやLINEで予約できると助かります。

LINE、メール相談が出来るようになるともっと気軽に相談できて良いなと感じました。

実際の職場体験などの増設。

めちゃくちゃ満足しているので無いです。

居場所でのイベントをもっとしてほしい。

＜初めてメルクを知ったとき、初めてメルクに来たとき、どう思ったか？＞

初めてこそ不安でしたが、すぐに打ちとけあえるような空気を感じました。ここなら続けられると思い

ました。

しぶや若者ハローワークでメルクマールのことを知った。相談員の方は親身になって話を聞いてくれて

過去の記憶の整理や新しく人生を始めるためのアドバイスを得ることができた。

一番最初はメルクマールに対して「大丈夫かな？」という不信感を抱くところもありました。

精神科での診療や、1人での対処に限界を感じ、カウンセラーを求めていましたがカウンセリングだ

けを受けようとすると料金が高いことや無料の電話相談では話が噛み合わないことが多く、対面で家

からも近く資格を持った方に無料で相談できるというのはとても魅力的でした。

実際に相談員の方とお話ししても安心感があり、今の自分の状態にとても合わせて話を聞いていただ

いたり提案をしてもらえているなと感じました。

はじめはあまり期待していなかったが、話していくうちに楽しくなった。

一度見学に行った時、利用者同士が楽しげに交流をしており、継続して通えるか多少不安に思った。

区の施設で、成人を過ぎても会話が苦手な私に寄り添った対応をしてもらえる場所があるということに

驚きました。

両親と共に来ました。どちらかというと、ただついて行っただけでした。

３．家族・その他の声(一部校正あり)

＜メルクマールせたがやを利用して良かったこと、役立ったこと、変化を感じたこと＞

家族会では、子どもの接し方、親の対応の気をつけることなどとても参考になっています。個別相談は

親自身の心配事、関わり方など話を聞いてもらい自分だけで抱えこまなくてよいので助かっています。

子供のことを相談しているが、自分自身の話も聞いてもらい振り回されていた自分にも気づけました。

まだまだ出来ませんが、子供との距離感や子供も一人の個人であり、又、私も一人の個人として生きて

いいんだと感じるようになりました。

親では理解できない若い人特有の考えや趣味について聞いていただけるところがありがたいと思って

います。

いつもどんな細かいこともゆっくり話を聞いてくださってありがたいです。また娘の小さい時のことを

聞かれて、普段あまり考えていないのですが、なかなか思い出せないことも思い出すことができまし

た。幸せなことを沢山思い出すことも出来て嬉しかったです。

本人との会話が増え、親子関係が改善していると思う。

悩み事を開示出来る場ができ、心の浄化に役立っています。相談の日が、息子の現状の把握や家族の関

わり方などを見直すきっかけとなっています。

たくさんのアドバイスをいただき心が軽くなりました。子どもとの会話の中で先生がおっしゃった事

を話すと、自分の気持ちを理解してくれてすごいと本人も相談に伺う様になりました。先生は常に子ど

もに寄り添ってくださり大変信頼し自信が持てる様になったようです。家族以外の方に相談できる機

会をいただけとても良かったと思います。

私の話を否定せずに聞いていただき、失っていた母親としての自信を取り戻すことができました。ま

た、本人への対応において、要求をのむことが愛情だと勘違いしてしまいそうになったときに、何が本

人のためになるのか考えることを促してくださいました。おかげさまで親子関係も改善してきており、

本人も自立に向けて少しずつ進んでいます。

自分の息子に対する接し方で迷っている時に、自分の判断が、相談する事によって相手にどんな影響を

与えてしまうかなど気付かせてもらえることが良かった。

話すことで自分の思いを改めて確認できた。傾聴してもらえるので話しやすかった。子どもの別な側面

（良い面）に気付かせてもらえて、子どもなりにがんばっているんだなと思った。子どもへの具体的な

声かけや接し方のアドバイスをもらえて参考になった。

家族として心の病を抱える娘への接し方など相談させてもらえて、このような場所があると言うだけで

安心出来る。継続して相談出来ていることで自分の気持ちが安定している。

＜今後、改善してほしいこと、取り組んでほしいこと＞

提携駐車場があると助かります。

子供の面談時の話がもう少しわかると嬉しい。

たくさんの方々にこのような相談できる場所があることを知らせていただけると悩んでいる方たちも

助かると思います。

本人が家から出られない時、自分からは支援を求められない時に、自宅を訪問し、話し相手になってく

ださる方がいるとありがたいと思います。

引っ越してからも続けさせてほしい（有料になってもかまいません）。

ひきこもりからどんな状況で脱せられたか、逆に脱せられなかった事例を読んで参考にしたい。

＜相談対象者のこと、相談対象者との関係について悩んだときに、支えになったこと＞

家族会や出張セミナー講師の方から学んだことを読み返すことで心の整理ができた。子の担当の方がて

いねいに関わってもらっているので安心感がある。

声掛け・言葉掛けの仕方がとても助けになりました。悩んでいるのは悪いことじゃない、似た境遇の方

も沢山いると知った。

本人の現在の心の状況など具体的に教えて頂けて、本人との接し方に参考になります。

暴力の対処を教えてもらえた(離れる、警察呼ぶ)。

失敗してもここで相談できるという前提があったので、思い切って本人と話し合うことができた。

他の家族は頼り／支えにならなかったのでメルクマールさんが唯一の支えでした。結局は自分で自分を

支えられるようにならないといけないとも気づかされました。映画観賞など気分転換になる趣味は少し

無理をしてでも続けるようにしました。

とにかく冷静になる、自分自身のことも含め客観視する、決して自分自身を責めないというか責める必

要ないのだということを教えて頂き、心が楽になりました。

自分の行動に勇気を出せない時など、勇気の出し方、自分の気持ちのあり方を教えてもらい、支えにな

っている。

声のかけ方、接し方のヒントを頂けました。家族には気づきにくい変化や良い点に気づかせてもらえま

した。

どう対応すればいいのか、このままのコミュニケーションの取り方でいいのか不安になった時に「こん

なケースもありましたよ」と他の方がどんな風にされているのか聞くことができた。

病院のカウンセラーさんに言われた専門用語をさらに噛み砕いてわかりやすく教えて頂けたり、親とし

ての悩みを丁寧に聞いていただけた。

＜相談対象者のこと、相談対象者との関係について悩んだとき、あればよいもの／もっと広まってほしいこと＞

家族会がもっと充実してほしい。家族の話は参考になるし、皆さんの話を聞き、共感も得られる。

区の相談に医療関係の支援も含まれると良いと思います。

不登校なので人とのコミュニケーションや、勉強の遅れなど気になるので，その分野の支援があれば助

かります。

「ひきこもり」笑顔への一歩〜ご家族のためのパンフレット〜 とてもわかりやすくて良かった。

緊急で相談したい時に電話での対応をしていただけるとありがたい。

多少反応が遅くてもよいので、ラインかチャットで相談できるツールもあればよいなと思いました。

悩んでいる事を気軽に話せる場所があるといい。

特性を持った人たちがどのように社会で生きているのか、どんな工夫をしているのかなど、実体験を知

ることができるととても参考になります。本はあると思いますが特別な人ではなく普通にいるんだと

いうことも生きていく大きな力になると思います。

このようなサポート機関があることをもっと周知してほしい、本人が自分で見つけられるように。ま

た、「ひきこもり」というWordは強いので、自分は違う、と思う人には入りにくいと思うので名称は

考えた方がいいと思う。ビルの表札にあるのでいつも思います。

ボランティアの機会、なんらかの社会参加の機会があるといい。

Ⅷ

 広報・啓発活動

 １．広報・啓発活動

２．視察・見学対応

Ⅷ．広報・啓発活動

１．広報・啓発活動

 １)ニュースレター

メルクマールせたがやでは、毎月居場所活動のスケジュールとあわせてニュースレターを発行

している。ニュースレターでは、実施したイベントの様子や居場所プログラムの紹介など、メル

クマールせたがやの活動が伝わるように作成している。ニュースレターは、利用者に配布するだ

けでなく関係機関にも送付している。

 ニュースレターの例(令和7年3月)

 ２)ホームページにおけるブログ

メルクマールせたがやでは、広報の一環として居場所活動の様子をブログで発信している。

QR コード

自動的に生成された説明

(https://3cha.tokyo)

ブログでは、ニュースレター同様にイベント・プログラムの内容について写真を掲載しながら

紹介している。ブログの読者に、メルクマールせたがやの取組みや活動の様子が伝わるような内

容を意識して作成している。なお、ホームページは居場所だけでなく家族会や出張セミナーの周

知の場としても活用している。

 ３)事業紹介（研修会・会議体講師、会合の出席など）

事業紹介は、具体的な活動内容や利用者の様子などを周知し、若者・ひきこもり支援に係る地

域の支援者にメルクマールせたがやを知っていただくことを目的としており、地域に理解者が増

えることが、潜在的なニーズの掘り起こしにつながると考えている。また、「リンク」を運営する

一機関として、ひきこもりの課題を有する世帯を支援している支援者に、有効に「リンク」を活

用していただけるよう、ぷらっとホーム世田谷とともに、「リンク」の機能や8050問題への多機

関協働での支援の進め方に関して、積極的に研修などでの広報に努めている。

令和6度は学会発表を行い、全国に向けて「リンク」の活動を通じた社会課題解決のありよう

を提示し、参加者から意見をもらう機会を得た。

研修会・会議体（リンク）

＜区内＞

あんしんすこやかセンタースキルアップ研修　講師

ひきこもり（8050問題）の理解・支援力向上研修 講師

発達支援コーディネーター連絡会

よりそいホットライン

ヤングケアラーコーディネーターヒアリング

北沢地域合同地区包括ケア会議

＜区外（国・都道府県など）＞

自治体講演会・情報交換会

厚生労働省令和6年度社会福祉推進事業「ひきこもり支援にかかる支

援ハンドブックの策定に向けた調査研究事業」ヒアリング/トーマツ

　ポスターセッション：世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」に精神科医が関わる意義

　コラム　世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」～重層的支援体制整備事業の活用～

　一般演題：世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」～重層的支援体制整備事業の活用 2年間の実践報告と課題～

作業療法ジャーナル 2024年12月号 【特集】訪問での精神科作業療法 (58巻12号)

第27回日本精神保健・予防学会

学会発表・雑誌投稿（リンク）

第31回日本精神障害者リハビリテーション学会

　自主シンポジウム：多職種アウトリーチが目指すものを共に考えよう！～医療・保健・福祉はいかにクロスオーバーできるか～

研修会・会議体（メルクマール）

あんしんすこやかセンタースキルアップ研修

昭和女子大学見学実習

三宿・池尻まちこま会

世田谷区都任用スクールカウンセラー連絡会

世田谷区任用スクールカウンセラー連絡会

子ども相談担当係長会

世田谷地域中高生支援者懇談会

みつけばハウス主催ミドル事業報告会　パネリスト

野毛青少年交流センター地域懇談会

希望丘青少年交流センター地域懇談会

４)情熱せたがや、始めました。(略してねつせた！)による情報発信

世田谷区では、若者による若者向けのソーシャルネットワークサービスを利用した情報発信を

行っている。長期休暇の時期などにあわせて、メルクマールせたがやの利用を促すメッセージを

発信した。

５)地域と若者の交流

若者と地域の交流の機会として、野毛青少年交流センター主催の「のげ青縁日」、池之上青少年

交流センター主催の「青年文化祭」、池尻児童館主催の「がやがや村祭り」にせたがや若者サポー

トステーションと一緒に世田谷若者総合支援センターとして「ワニたたき」という子ども向けの

出店を行った。また、池尻児童館の餅つき大会にも利用者と一緒に参加した。

２．視察・見学対応

 メルクマールせたがやには、毎年区内外を問わず視察や施設見学の申込みがある。特に、居場

所のコンセプトや機関連携など実際の運営について質問を受けることが多い。ひきこもりの方が

どのようにして利用に至るのか、相談支援と居場所支援の取組みについて意見交換をすることが

あり、メルクマールせたがやとしても、視察を通して他の自治体の取組みを知る貴重な機会とな

っている。

１)視察対応

 令和6年度の主な視察対応は以下の表の通りである。「リンク」が開設したことにより、メル

クマールせたがやには主に若者支援施策に係る内容が多く、「リンク」には主にひきこもり支援

や重層的支援体制整備事業に係る内容の依頼が多い。視察対応では、相談窓口機能だけではない

継続的な相談支援や居場所活動の他、協議会の運営や他機関連携について意見交換を行った。

視察対応（メルクマール）

港区生活福祉調整課ひきこもり支援担当

金沢市議会会派みらい金沢

くらしき若者サポートステーション

東洋大学みんなのゼミナール

愛知県岡崎市議会議員団

視察対応（リンク）

港区生活福祉調整課ひきこもり支援担当

鹿児島県鹿屋市福祉政策課

愛知県岡崎市議会議員団

Ⅸ

 支援方針に基づく取組みの進行状況

 １．令和6年度の取組み状況

 ２．今後の課題と展望

Ⅸ．支援方針に基づく取組みの進行状況

令和5年度の事業報告書において、今後5年間の取組みについて以下の2つをあげた。

１．世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」におけるぷらっとホーム世田谷との連携・協働

２．早期支援・早期回復を目的とした中高生世代への切れ目のない支援

この方針に基づく取組みの進行状況について報告する。

１．令和6年度の取組み状況

 １)世田谷ひきこもり相談窓口「リンク」におけるぷらっとホーム世田谷との連携・協働

 「リンク」開設から3年が経過した。「リンク」では、メルクマールせたがやとぷらっとホー

ム世田谷からそれぞれ担当者がついて当事者の支援にあたる。初回相談の段階から2機関が協働

することで、見立てや当事者のニーズに合わせて、2機関の強みを活かした支援の進め方ができ

る。「リンク」には、本人や親だけでなく、兄弟や知人などからも相談申込みがある。また、高齢

福祉や障害福祉等の支援機関からの問い合わせや相談も多く寄せられている。令和6年度から、

世田谷区の重層的支援体制整備事業の一環で5地域の総合支所にある保健福祉センターが窓口

となって多機関協働事業が区全体の動きとして始まったことで、メルクマールせたがやや「リン

ク」が他機関主催の支援会議、個別ケース検討会議に呼ばれる機会も増加した。多機関協働は、

支援会議で展開していくような、分野を横断した重層的支援のあり方を模索しながら展開する。

複合的な課題を抱える世帯への対応事例を蓄積していき、分野の垣根を越えた重層的支援が、区

内で確実に根づいていくことを目指し、従来型の支援や制度の狭間にあり支援が届きづらかった

層への、より良い支援体制の構築に取り組んできた。

 メルクマールせたがやは、「リンク」の運営にあたり、これまでの支援活動のノウハウを活かす

形でぷらっとホーム世田谷と協働体制を取ってきた。寄せられる相談内容が複雑化・複合化して

おり、当事者だけでなく、支援に行き詰った支援者からのニーズも寄せられるようになっている

と感じている。今後は、支援・制度の狭間にこぼれ落ちていたであろう困難を抱えた世帯に関わ

る1機関としてだけでなく、支援者支援の視点で地域の多機関協同事業の後方支援の役割を担っ

ていくことになると考えられる。

２)早期支援・早期回復を目的とした中高生世代への切れ目のない支援

 メルクマールせたがやは、所管課が子ども・若者支援課から生活福祉課に移管されたが、引き

続き区の若者総合相談センターに位置づけられており、10代の若者への早期支援であるティー

ンズサポート事業を重点事業とする。令和6年度の活動実績は、新規相談登録件数における10

代の割合が42%と、状態が長期化・重篤化する前に相談利用につながってきていると考えられる。

また、支援を必要とする若者が制度の狭間にこぼれ落ちないようにするためには、複数の機関

が重なり合うことで年齢による切れ目をなくし、支援のタスキをつなぐことが重要である。関係

機関との個別ケース検討会議の開催は、10代の若者を対象としている機関と実施する割合が増

えており、子ども・若者支援協議会における指定支援機関の役割を早期支援の文脈で果たすこと

ができつつある。中学校や高校などの教育機関、区児童相談所や子ども家庭支援課といった児童

福祉の機関との連携の実績を重ねていく。令和6年度は、区内公立小中学校に配置されているス

クールカウンセラーの連絡会に参加する等、教育との連携に取り組んだ。今後も不登校支援に携

わる職員や、生徒・保護者と直接つながれる機会を大切にし、切れ目のない支援に取り組む。

 その他、世田谷区子ども・青少年協議会では、「居場所」をキーワードにした若者の参加参画、

地域と若者のつながりを主な目的として学校モデル事業を開始している。学校モデル事業では、

学校内に地域の大人がカフェを開き、学校という社会生活場面に安心できる居場所を作る取組み

を行っている。令和6年度は、都立世田谷泉高校での校内カフェモデル事業に参加した。

２．今後の課題と展望

１)多種多様なニーズへの対応

 多機関協働事業が動き始めたことで、これまで必要な支援につながれていなかったひきこもり

状態にある当事者やその家族に対して支援者を通じて関わる機会が持てるようになってきた一

方で、世帯に関わりのある支援者からも多種多様な支援ニーズを投げ込まれる状況にある。たし

かに、「ひきこもり」は病気や障害ではなく状態像を指す言葉であり、定義が幅広いが故に一人ひ

とりの抱える困難さや支援ニーズは一律ではない。

 メルクマールせたがやは、職員の大半が心理の専門資格を有していることから、他機関から理

支援を求められることが多い。しかしながら、メルクマールは心理相談に特化したカウンセリン

グセンターでもなく、職員の中には社会福祉士、精神保健福祉士といった福祉の専門資格を有す

る者もおり、心理や福祉の専門知識を活かして個別相談や居場所活動等を行っている機関である。

「生きづらさ」は大なり小なり誰もが有している主観的な感覚であり、社会参加できている人が

感じていてもおかしくないものである。設立当初から生きづらさを抱えた方々を利用対象として

いるが、自分らしい社会参加のあり方を見つける社会参加の準備支援が目的である。実際の活動

と他機関から求められる支援ニーズにずれが生じないように支援における枠組みを改めて整理

する必要がある。

 令和7年度を迎え、厚生労働省がひきこもり支援マニュアルの改訂版が発表された。また、世

田谷区の子ども条例が改訂されるなど、区や都、国の支援施策の動向を視野に入れながら、行政

における若者支援、ひきこもり支援機関として活動していく。

【用語解説】

□ アウトリーチ：主に社会福祉の領域で使われる用語で、「支援者側から地域に出向いて支援を

必要とする人に必要な支援と情報を届ける活動」のこと。メルクマールせたがやでは、利用者

の自宅への訪問相談や地域に出向いての出張相談会などを実施している。また、他機関との連

携や支援ネットワーク構築も広義のアウトリーチ活動である。

□ アセスメント：「査定」と訳される用語で、相談者との面接場面でのやり取りの様子や聴取し

た情報などを基に、相談者の心理状態や力のある部分といった能力、課題などを見立て、今後

の支援方針を計画すること。相談者を理解し、適切な支援を提供することを目指す。

□ インテーク訪問：初回の相談を訪問で実施すること。通常、初回相談はメルクマールせたがや

への来所で実施するが、本人や家族が来所困難な場合は電話での相談希望を受けて訪問による

初回の相談を実施している。支援を必要とする人へのアウトリーチ支援活動のひとつ。通常の

訪問と同様にインテーク訪問においても、ひきこもりの本人の了承を前提としており、本人か

らの明確な拒否がある場合は実施しない。

□ エンパワメント：個人や集団が本来持っている潜在能力を引き出し、湧き出させることを意味

する用語。利用者が本来の力を発揮できるようになることで、自ら主体的に課題解決に取り組

めるようになると考え、支援者は利用者の強みや能力を尊重した肯定的な働きかけを行う。

□ サテライト：ここでは、「拠点」という意味で使用している。メルクマールせたがやは世田谷区

の三軒茶屋が本拠地であるが、世田谷区は区役所機能が5地域に分かれており、広域で人口も

多い自治体であることから、区民の身近な場所で支援を届けるためには「拠点」が各地域に必

要と考えており、サテライトとして出張相談会を4地域の総合支所や希望丘青少年交流センタ

ー「アップス」で定期開催している。

□ 生物・心理・社会モデル：遺伝子や身体機能などの生物学的な面、気分や行動といった心理学

的な面、生活する社会環境や文化などの社会的な面という3つの側面から、課題や困難な状況

を包括的にとらえるという考え方。精神科医のエンゲルによって提唱されたモデル。

□ ピアサポート：「同じ悩みを抱える仲間同士の支え合い」を意味する用語。メルクマールせた

がやにおいては、居場所活動はひきこもりに悩む本人同士のピアサポートの場であり、家族会

はひきこもりに悩む家族同士のピアサポートの場になっている。対等な関係性の中でお互いに

支え合いながら成長し、課題を解決していく。

□ 本人：ここでは、「ひきこもりなど生きづらさを抱えた方」を指す用語として使用している。メ

ルクマールせたがやはその方々の多様な自立や望む生き方をサポートする機関であり、家族が

利用主体の場合も“家族を通した「本人」への支援”を実施している。

ダイアグラム

AI によって生成されたコンテンツは間違っている可能性があります。 (正方形/長方形)

○ アクセス

 【東急田園都市線・世田谷線】

 三軒茶屋駅徒歩3分

 【小田急バス】〔下61〕 駒沢陸橋‐北沢タウンホール

 三軒茶屋から徒歩1分

世田谷若者総合支援センター 令和6年度メルクマールせたがや事業報告書

<令和6年4月～令和7年3月>

令和7年5月 発行

編集・発行 世田谷若者総合支援センター メルクマールせたがや

事業運営 公益社団法人 青少年健康センター【茗荷谷クラブ】

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂2‐16‐7 世田谷区役所三軒茶屋分庁舎5階

TEL 03－3414－7867

なやむな

FAX 03－6453－4750

HP https://www.city.setagaya.lg.jp/02412/8950.html

 https://3cha.tokyo/